茨城県教育財団文化財調査報告第220集

袋内A遺跡

一般県道高崎岩井線バイパス事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県石下土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第220集

袋内A遺跡

ふくろ うち えー い せき

一般県道高崎岩井線バイパス事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県石下土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため，また，県土の均衡ある発展を支える基盤として，県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

このたび，茨城県石下土木事務所は石下町大字向石下において，一般県道高崎岩井線バイパス事業を計画いたしました。その事業地内には袋内Ａ遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県石下土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成14年11月から平成14年12月まで発掘調査を実施しました。

本書は，袋内Ａ遺跡の調査成果を収録したものです。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県石下土木事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，石下町教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県石下事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した，茨城県結城郡石下町大字向石下字袋内829番地の１ほかに所在する袋内（ふくろうちえー）Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調査　平成14年11月１日～平成14年12月31日

整理　平成15年６月１日～平成15年６月30日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第一課長阿久津久のもと，以下のものが担当した。

調査第１班長　川津法伸，主任調査員　近藤恒重，調査員　越田真太郎

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長鶴見貞雄のもと，調査員早川麗司が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X軸＝＋12380m，Y軸＝＋11000mの交点を基準点（Ａ１a1）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠し「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　抄録の北緯および東経の欄には，世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付して併記した。

3　本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　住居跡－ＳＩ　掘立柱建物跡－ＳＢ　土坑－ＳＫ

遺物　土器・陶器－Ｐ　拓本記録土器－ＴＰ　土製品－ＤＰ　石器・石製品－Ｑ　金属製品－Ｍ

土層　撹乱－Ｋ

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

炉・火床面　粘土・繊維土器　使用痕

土器●　土製品○　石器・石製品□　金属製品△　硬化面

6　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は500分の1，遺構は60分の1に縮尺して掲載した。

(2)　遺物は原則として3分の1の縮尺にした。

7　「主軸方向」は，住居跡については炉または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし，その他については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は，主軸・長径が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。〔　〕を付したのは推定である。

8　遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1)　計測値の単位はcm及びgで示した。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

(2)　備考欄は，残存率や写真図版番号等，その他必要と思われる事項を記した。

(3)　遺物番号は，土器・拓本のみ掲載の土器片，土製品，金属製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

9　遺構一覧表における計測値は，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

抄　　録

ふりがな	ふくろうちえーいせき
書名	袋内Ａ遺跡
副書名	一般県道高崎岩井線バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第220集
著者名	早川麗司
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　ＴＥＬ029-225-6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　ＴＥＬ029-225-6587
発行年月日	2004（平成16）年３月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
袋内Ａ遺跡（ふくろうちえーいせき）	茨城県（いばらきけん） 結城郡（ゆうきぐん） 石下町（いしげまち） 大字向石下（おおあざむかいいしげ） 字袋内（あざふくろうち）829番地の１ほか	08523 －047	36度 06分 41秒 （36度 06分 52秒）	138度 37分 19秒 （138度 37分 08秒）	20m	20021101 ～ 20021231	1,304m²	一般県道高崎岩井線バイパス事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
袋内Ａ遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　４軒	縄文土器	縄文・古墳・奈良時代の複合遺跡である。縄文時代前半の貝塚を伴わない集落跡で，住居跡が４軒が調査されている。
		古墳	竪穴住居跡　１軒	土師器	
		奈良	竪穴住居跡　１軒 掘立柱建物跡２棟	土師器　須恵器 土製品（紡錘車・支脚） 鉄製品（鎌）	
		時期不明	土坑　14基		

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 9
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 9
　　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 15
　　3　奈良時代の遺構と遺物 …… 18
　　(1)　竪穴住居跡 …… 18
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 23
　　4　その他の遺構と遺物 …… 25
　　(1)　土　坑 …… 25
　　(2)　遺構外出土遺物 …… 27
遺構一覧表 …… 29
　第４節まとめ …… 29
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県は，産業・経済の活性化や県全域の発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めている。

平成14年6月11日，茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに，一般県道高崎岩井線バイパス整備事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は，平成14年6月19日から6月21日に試掘調査を実施した。平成14年6月27日，茨城県教育委員会教育長から茨城県石下土木事務所長あてに，事業地内に袋内A遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成14年7月10日，茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき，土木工事の通知が提出された。平成14年7月29日，茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，茨城県石下土木事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年8月16日，茨城県石下土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに，一般県道高崎岩井線バイパス事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。その結果，平成14年9月10日，茨城県教育委員会教育長から茨城県石下土木事務所長あてに，袋内A遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は，茨城県石下土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成14年11月1日から12月31日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

調査は，平成14年11月1日から平成14年12月31日まで実施した。調査経過については下表の通りである。

工程＼月	11月			12月		
調査準備						
表土除去・遺構確認						
遺構調査						
洗浄・注記・写真整理作業						

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

袋内A遺跡は，茨城県結城郡石下町大字向石下字袋内829番地の1ほかに所在している。

石下町は茨城県の南西部に位置し，東はつくば市に，西は猿島郡猿島町に，南は岩井市・水海道市に，北は結城郡八千代町・千代川村にそれぞれ接している。町の東側に小貝川，中央部に鬼怒川，東仁連川，西側には飯沼川が南北に流れており，また，それらに注ぐ支流が町域を縦横に流れている。地形はこれらの河川により形成された沖積低地と台地に大きく二分することができる。低地の多くは近世以来開拓と用排水路が整備された結果，現在まで至る水田地帯になっている。鬼怒川と東仁連川に挟まれた標高約20m～25mの洪積台地は，結城台地の南部にあたり，河川によって浸食されて洪積台地と沖積地とが複雑に入り組んだ様相を呈している。

当遺跡は，この洪積台地上にあり，標高約20mで東西幅5㎞にも満たない狭い平坦面に立地している。調査前の現況は道路・畑地である。

第2節　歴史的環境

遺跡の多くは台地上にあり，沖積低地にも数は少ないがその分布はみられる。ほとんどの遺跡が複合遺跡である。ここでは当遺跡の時代・時期と関連する遺跡を中心に述べることとし，あわせて周辺の主な遺跡について取り扱うこととする（第1図，表1）。しかし，発掘調査例がほとんどないため，遺跡の詳細については不明な点が多い。

町域には47か所の縄文時代遺跡が確認されている。飯沼川の沖積低地に面した台地上に梁戸貝塚<8>・塚前貝塚<9>，鴻野山貝塚<10>がある。梁戸貝塚と鴻野山貝塚は昭和初期に大山史前学研究所によって実地踏査がなされ，古鬼怒湾奥部の貝塚としてその名が知られるようになった。

梁戸貝塚は1986（昭和61）年にも実地踏査がおこなわれ2地点の貝の散布が確認され，縄文時代前期関山式期の地点貝塚であることが明らかになった[1]。鴻野山貝塚の大山史前学研究所による踏査の成果についての詳細は不明だが，貝層から出土したほぼ完形の関山式土器の写真が報告されている。この貝塚は1985（昭和60）年11月にその範囲が確認され，9か所の地点貝塚であることがわかった。このうち鴻野山字郷ノ上75番地の1に所在する第Ⅰ貝塚が発掘調査されている[2]。その結果，ヤマトシジミを主体とする純貝層，混土貝層，焼土・灰層，焼貝層からなる貝塚であることが明らかにされた。貝層直下からは住居跡が1軒確認されている。出土土器の大半は関山式土器であり，動物遺存体は貝類では汽水性のヤマトシジミ，カワアイ，マガキ，鹹水性のハマグリ，ハイガイ，ウチムラサキ，サラガイ，ムラサキガイ，淡水性のオオタニシ，マツカサガイ，魚類ではボラ，クロダイ，不明種の骨，獣類ではニホンジカ，イノシシカが出土している。鴻野山貝塚および梁戸貝塚の動物遺存体の種類は酒詰仲男氏も同定している[3]。

周辺にはさらに早期茅山式期を主体とし，ハイガイ，サルボウ，ベンケイガイ，マガキ，カガミガイ，オキシジミ，ハマグリ，アサリ，ベニサラガイ，シオフキ，ヤマトシジミ，ツメタガイなどの貝類が発掘調査によって確認された地点貝塚の水海道市貝殻山遺跡や築地遺跡などがある。当地域の貝塚が形成されたのは，気候

が温暖化し海水面の上昇がピークに達した縄文海進の時期である。

本屋敷遺跡<21>では花積下層式土器が表面採集されているが，調査されていないため詳細は不明である。新六遺跡<49>，門畑遺跡<57>，淵内遺跡<74>，四ツ木遺跡<78>からも前期の土器が出土している。縄文海進によって環境が変化し，それに伴って形成された縄文時代前期遺跡群の相互関係は，未だ解明されておらず，今後の調査研究に負うところが大きい。前期以降の縄文時代遺跡も調査例の少なさから，不明な点が多い。国生本屋敷遺跡から中期の阿玉台式土器，勝坂式土器，加曽利Ｅ式土器，後期の堀之内式土器，加曽利Ｂ式土器などが表採および遺構より出土している[4]。

弥生時代遺跡は２遺跡のみで，集落の様相も墓制についてもほとんど明らかにされていない。本屋敷遺跡<21>が周知されているのみである。ここでは弥生時代後期の土器11点が報告されている。遺構は確認されていないが，地形的に遺構の存在が想定されている[5]。岡田字馬場堤下の台地上からは，弥生時代後期の壺形土器が２個体出土している。土器の様相から合口の土器棺墓の可能性が想定されている[6]。

古墳時代の遺跡は54か所周知されている。そのうち古墳は９か所，埴輪窯跡が１か所あり，低地を臨む台地上に立地している。最大の古墳群は神子女古墳群<６>で，後期の群集墳である。通称六十六塚といわれ，かつては85基の古墳が存在したといわれている。発掘調査された古墳は第28号古墳だけである[7]。調査の結果，墳丘は径13m，高さ1.12mの円墳であり，幅３mの周濠が巡っていることが判明した。主体部は長さ2.0m，幅1.5m，深さ0.15mの粘土槨であり，鉄鏃が出土した。墳丘やその裾部から円筒埴輪片が確認されている。時期は六世紀後半頃と考えられている。その他の古墳は調査されてないため詳細は不明だが，第27号古墳からは人骨・直刀・鉄鏃・円筒埴輪・人物埴輪，第37－１古墳からは人骨・直刀・鉄鍔・刀子・小玉・鉄鏃，第57号古墳からは人骨・直刀・勾玉・不明鉄製品がそれぞれ発見されている。香取塚古墳<４>は前方後円墳，御林古墳群<５>は円墳３基，北原遺跡<12>は円墳１基，東山塚古墳<33>は円墳１基であり，墳丘形態は推定されているが，時期等については不明である。

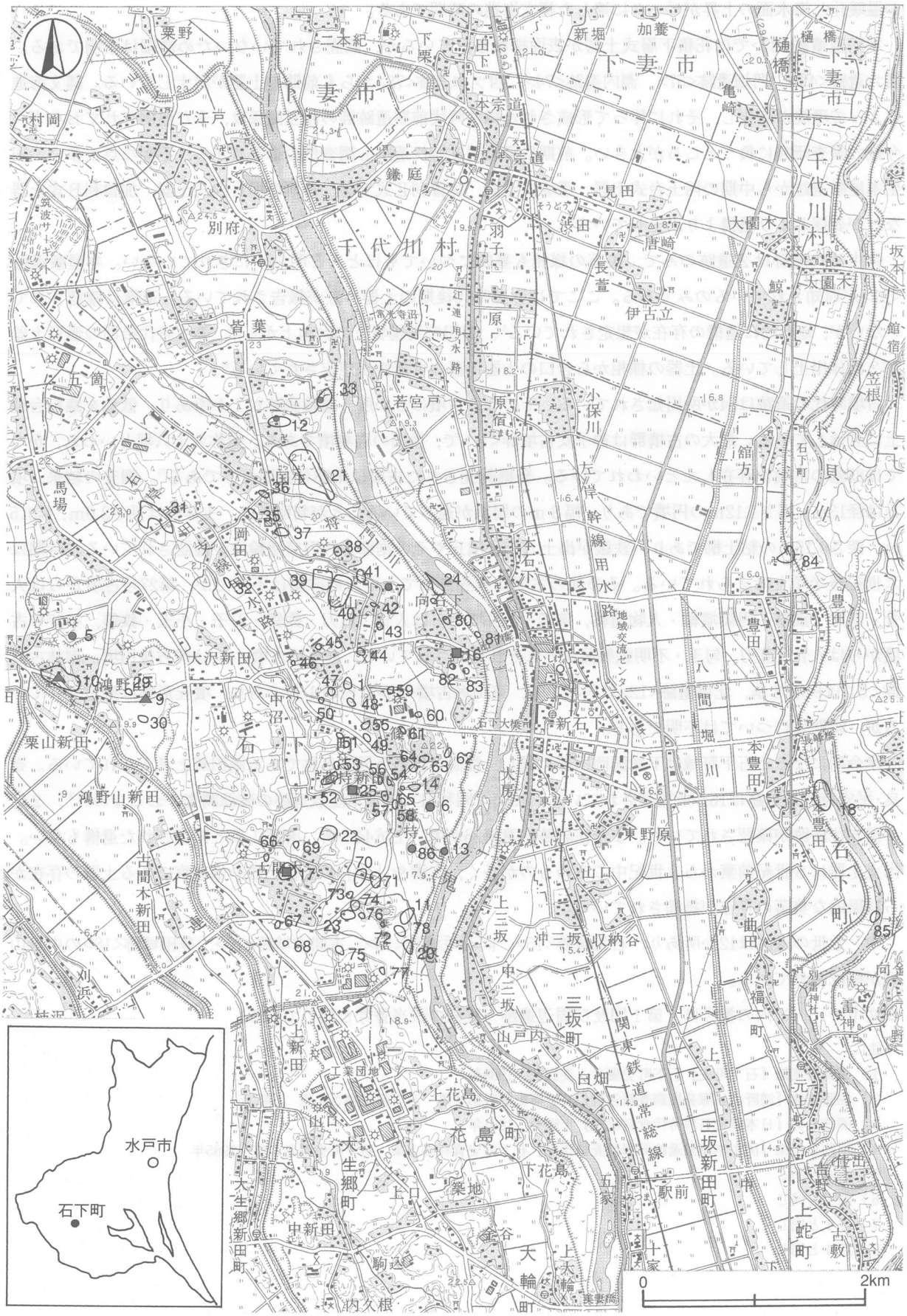
律令期になると石下町域は下総国岡田郡に属し，郡衙は郡名と同じ名称である岡田郷と考えられている。奈良･平安時代の遺跡は16か所確認されている。1986（昭和61）年に本屋敷遺跡の確認調査がおこなわれ[8]，２軒の竪穴住居跡が確認されている。また住居跡状遺構26か所，土坑44か所，溝跡１条と確認された遺構も多い。出土土器は８世紀前葉から９世紀中ごろのものが多く，大溝や「介」の墨書土器や朱書痕のある土器の存在から官衙的な集落の存在が指摘されている。

中・近世の遺跡は12か所あり，石毛城跡<15>，向石毛城跡<16>，古間木城跡<17>，豊田城跡<18>の中世山城が確認されている。

※文中の〈　〉内の番号は，第１図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註）

１）大森信英他『石下町史』石下町史編さん委員会　1988年
２）佐藤誠他『鴻野山貝塚発掘調査報告書』石下町史資料第２集　石下町史編さん室　1987年
３）酒詰仲男『日本縄文石器時代食料総説』土曜会　1961年
４）川井正一他『国生本屋敷遺跡発掘調査報告書』石下町史資料第１集　石下町史編さん室　1985年
５）註４と同じ
６）註１と同じ
７）註１と同じ
８）註４と同じ

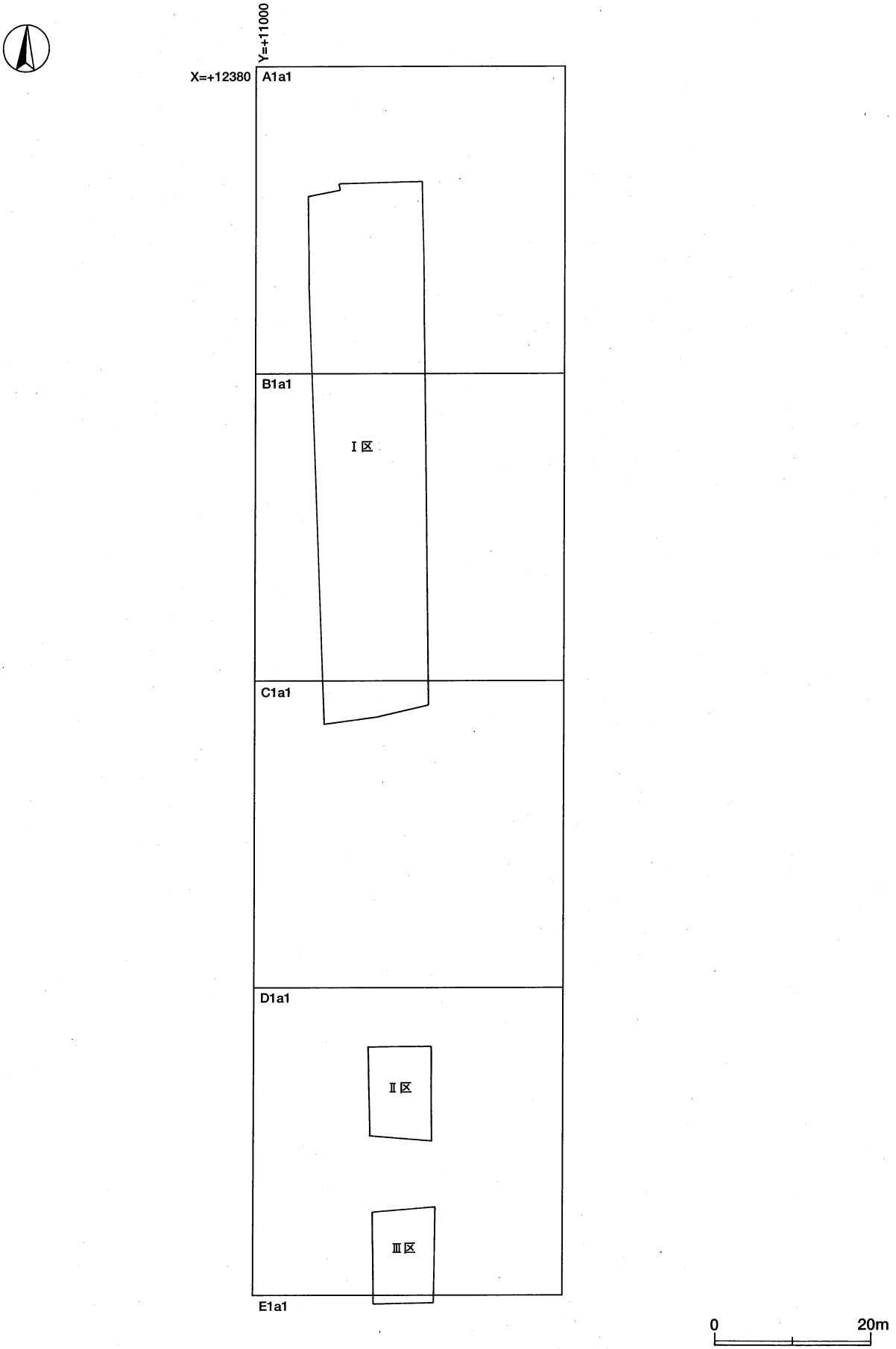


第１図　袋内Ａ遺跡周辺遺跡位置図

表１　袋内Ａ遺跡周辺遺跡一覧表（第１図中の●は古墳・古墳群，▲は貝塚，■は城館を示す。）

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	袋内Ａ遺跡	○	○		○	○		
2	陣屋古墳群				○			
3	陣屋埴輪窯跡				○			
4	香取塚古墳				○			
5	御林古墳群				○			
6	神子女古墳群				○			
7	登戸古墳群				○			
8	梁戸貝塚		○					
9	塚前貝塚		○		○			
10	鴻野山貝塚		○					
11	宮内遺跡		○		○			
12	北原遺跡		○		○			
13	稲荷山遺跡				○			
14	神子女遺跡		○		○			
15	石毛城跡						○	
16	向石毛城跡						○	
17	古間木城跡						○	
18	豊田城跡						○	
19	崎房遺跡		○		○			
20	古間木遺跡		○				○	
21	本屋敷遺跡		○	○	○	○		
22	内山Ｂ遺跡		○		○			
23	大久保遺跡		○		○			
24	東浦遺跡		○		○	○		
25	蔵持城跡						○	
26	屋敷尻遺跡		○					
27	天神後遺跡				○			
28	屋敷遺跡				○			
29	剣之峯遺跡					○		
30	五輪前遺跡					○		
31	保待山遺跡		○		○	○		
32	前原古墳				○	○		
33	東山塚古墳				○			
34	観音前遺跡		○		○			
35	伊勢宮遺跡					○		
36	坊山Ａ遺跡					○		
37	坊山Ｂ遺跡		○		○			
38	弁才天遺跡		○		○			
39	入田遺跡				○			
40	日枝前遺跡							
41	杉山前遺跡				○			
42	宿遺跡		○		○			
43	登戸前遺跡						○	

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
44	宿前遺跡				○			
45	向石下北山遺跡		○		○			
46	新畑遺跡					○		
47	美濃輪山遺跡							
48	袋内Ｂ遺跡		○		○			
49	新六遺跡					○		
50	原山遺跡					○		
51	清水遺跡				○	○		
52	大高山遺跡		○		○			
53	石塔遺跡					○		
54	塩田窪遺跡							
55	西原遺跡				○			
56	浦山遺跡		○		○			
57	門畑遺跡				○			
58	地蔵前遺跡		○		○			
59	元歩遺跡		○		○			
60	浦山Ａ遺跡		○		○			
61	浦山Ｂ遺跡		○			○		
62	新堀遺跡		○			○		
63	堂前遺跡		○		○		○	○
64	川戸遺跡		○		○			○
65	峯道遺跡							
66	入遺跡		○		○			
67	山王Ａ遺跡							○
68	山王Ｂ遺跡		○					
69	内山Ａ遺跡		○					
70	坊山遺跡		○		○			
71	山中遺跡		○		○			
72	寺田遺跡		○		○			
73	稲荷遺跡		○					
74	淵内遺跡		○					
75	松山向遺跡				○			
76	鎌田遺跡		○					
77	霜田向遺跡		○		○			
78	四ツ木遺跡		○		○			○
79	屋敷遺跡		○		○			
80	堂ノ前遺跡		○		○			
81	一盃館遺跡		○		○			
82	西館遺跡		○		○			
83	御殿前遺跡		○		○			
84	観音東遺跡				○			
85	曲田遺跡				○			
86	六所塚古墳				○			



第２図　袋内Ａ遺跡調査区設定図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

調査区は，便宜上Ⅰ～Ⅲ区に分けた（第2図）。調査前の現況は道路・畑地で，調査面積は1,304㎡である。調査の結果，縄文時代および奈良時代にかけて断続的に集落が営まれた複合遺跡であることが判明した。

遺構は，竪穴住居跡6軒（縄文時代4，古墳時代1，奈良時代1），掘立柱建物跡2棟，土坑14基である。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20cm）に4箱出土している。出土した主な遺物は，縄文土器，土師器，須恵器，陶器，磁器や，石器（磨製石斧・磨石・剥片）・石製品（軽石），土製品（支脚・紡錘車），金属製品（鉄鎌）などである。

第2節　基本層序

調査1区の北部（A1h5区）にテストピットを設定し，基本土層の観察を行った（第3図）。以下，テストピットの観察結果から土層の解説を行う。

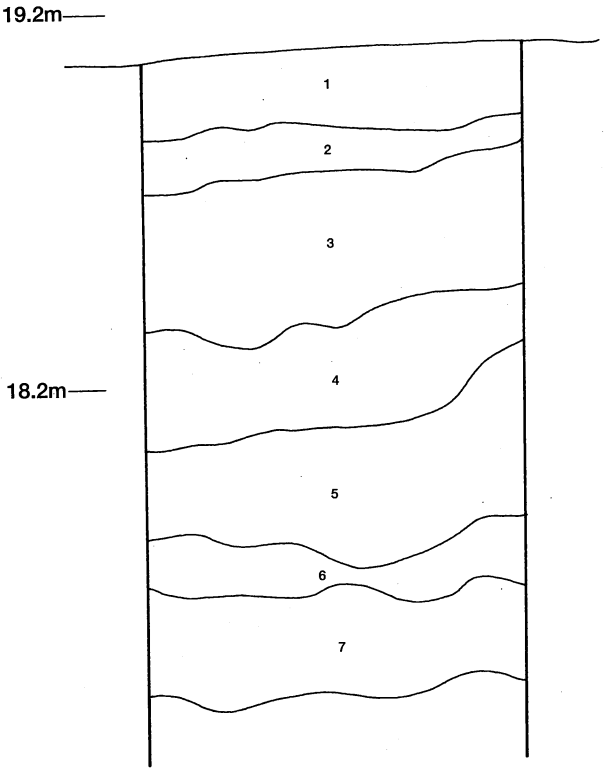
第1層は褐色のソフトローム層である。粘性・締りは普通で，層厚は18～22cmである。遺構は，本層の上面で確認できた。

第2層は暗褐色のソフトローム層である。粘性・締りは普通で，層厚は8～16cmである。

第3層は黒褐色のソフトローム層で第一黒色帯（BBⅠ）に相当すると考えられる。微量のガラス質粒子が認められ，姶良丹沢テフラ（AT）を含む層と考えられる。粘性は普通で，しまりは強く，層厚は30cmである。

第4層は褐色のハードローム層である。粘性・締りとも強く，層厚は18～34cmである。

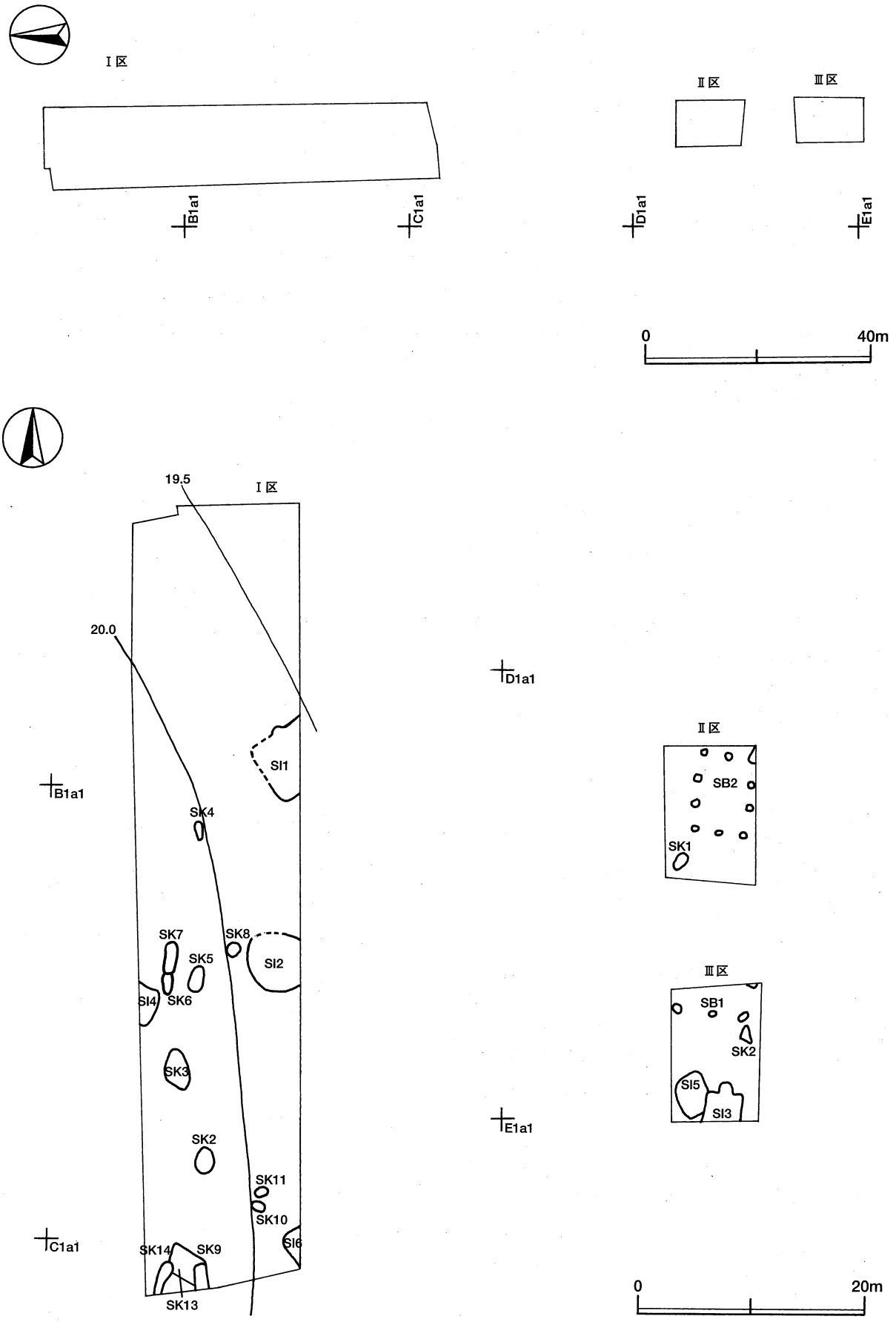
第5層は黒褐色のハードローム層で第二黒色帯（BBⅡ）に相当するものと考えられる。粘性は普通で，しまりは強く，層厚は22～48cmである。



第3図　基本土層図

第6層は灰褐色の粘土層で常総粘土層に相当するものと考えられる。砂粒をわずかに含み，層厚は6～20cmである。

第7層は黄橙色の粘土層で常総粘土層に相当するものと考えられる。砂粒をわずかに含み，層厚は24～30cmである。



第４図　袋内Ａ遺跡遺構全体図

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では，竪穴住居跡4軒を確認した。以下，遺構と遺物について記述する。

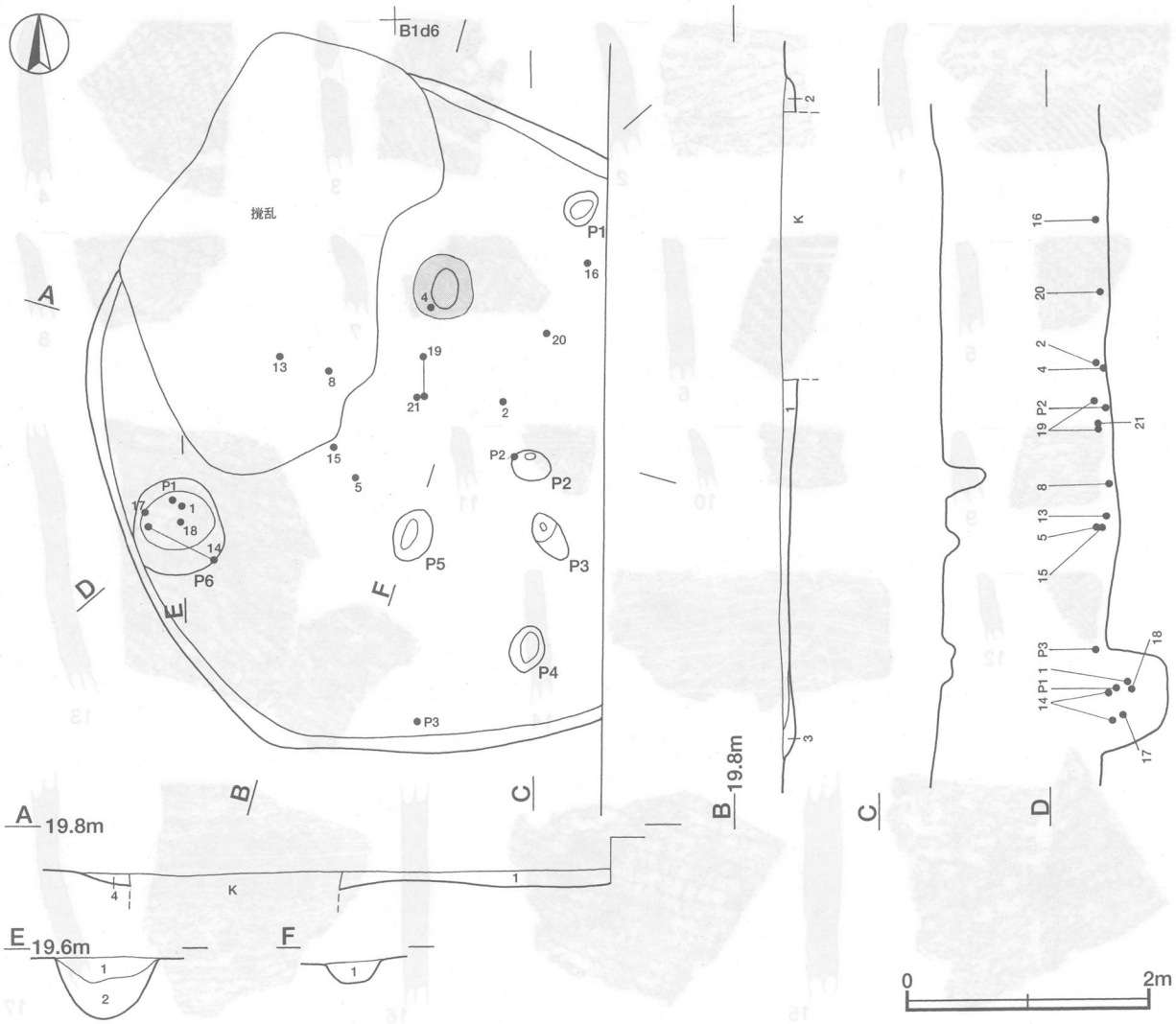
第2号住居跡（第5～7図）

位置　調査Ⅰ区のB1d6区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

規模と形状　東壁が調査区域外に延び，北西壁が撹乱により壊されている。長軸約5.61m，短軸約4.45mだけ確認された。平面形はややいびつな隅丸方形と考えられる。主軸方向はN－21°－Eである。壁高は約2～6cmで，各壁ともなだらかに立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

炉　北東壁寄りに付設された長径約54cm，短径約48cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さの地山面を使用し，赤変硬化している。



第5図　第2号住居跡実測図

ピット　6か所。いずれも深さが12～50cmと一定せず，配置も不規則であり，性格は不明である。

Ｐ６土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

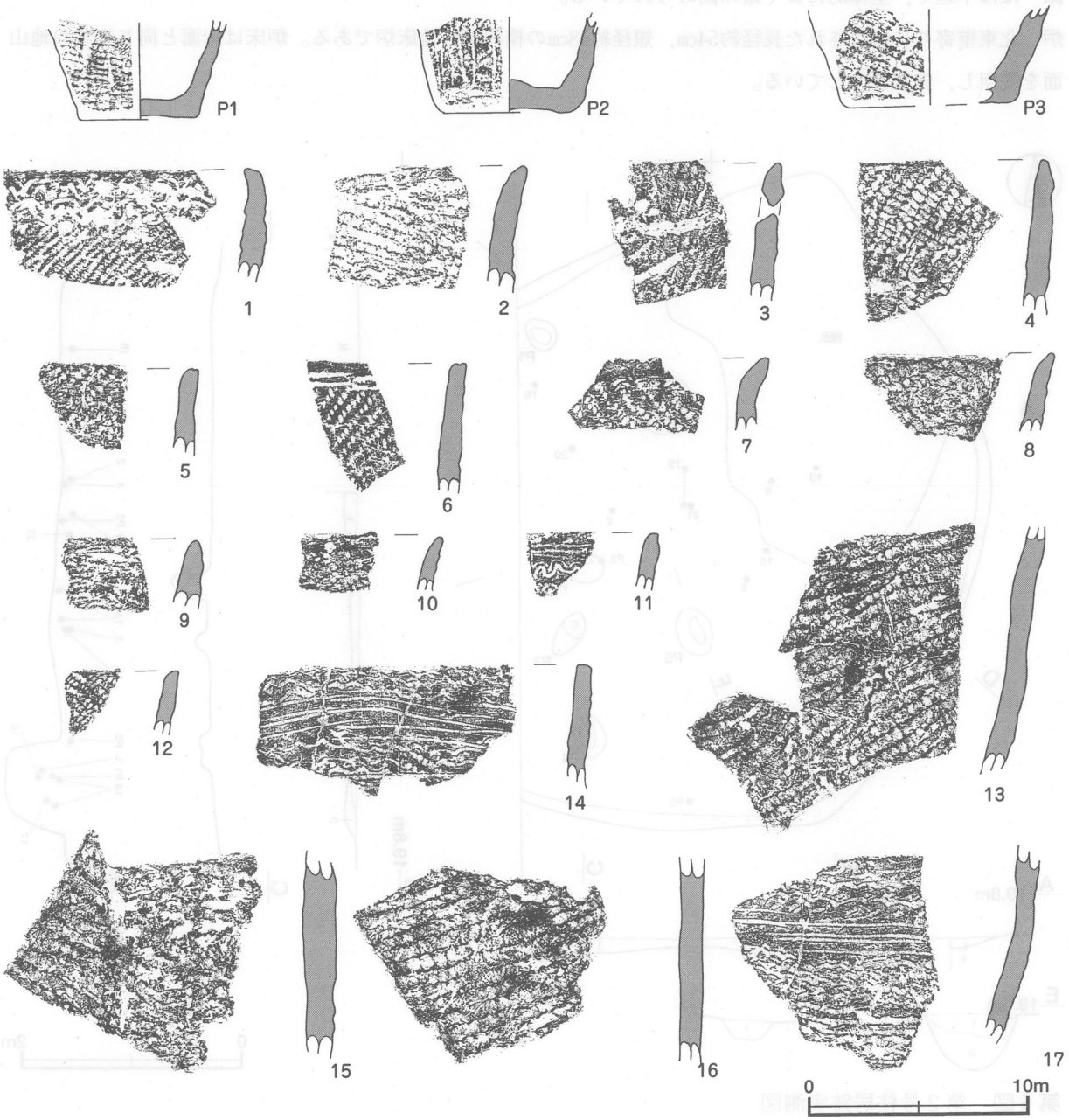
Ｐ５土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子中量，炭化粒子微量

覆土　4層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

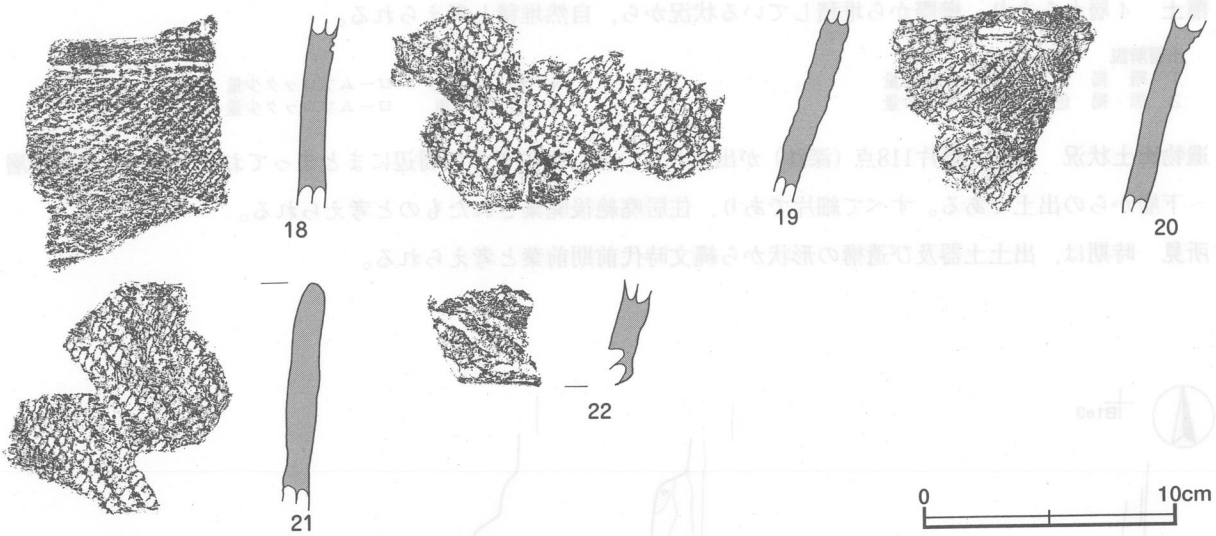
土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片547点（深鉢）が出土している。Ｐ６内からややまとまって出土しているが全体的に散在した状況で，すべて覆土下層から床面上にかけて出土している。すべて細片であり，住居廃絶後廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器及び遺構の形態から縄文時代前期前葉と考えられる。



第６図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



第７図　第２号住居跡出土遺物実測図⑵

第２号住居跡出土遺物観察表（第６・７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備　考
Ｐ１	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	5.6	白色粒子，繊維	明褐	普通	単節縄文	覆土下層	前期前葉
Ｐ２	縄文土器	深鉢	－	(4.5)	6.0	白色粒子，繊維	橙	普通	縦位の条線文	覆土下層	前期前葉
Ｐ３	縄文土器	深鉢	－	(4.5)	〔7.6〕	白色粒子，繊維	橙	普通	単節縄文	覆土下層	前期前葉

番　号	器種	文様の特徴	出土位置	備　考
8・9	深鉢	無節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
2・4・5・7・10・12	深鉢	単節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
3	深鉢	無節縄文，補修孔あり	覆土下層	前期前葉
6	深鉢	横位の半截竹管状工具による沈線，単節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
11	深鉢	半截竹管状工具による横位の平行沈線とコンパス文	覆土下層	前期前葉
15・22	深鉢	無節縄文	覆土下層	前期前葉
13・16・19・21	深鉢	単節縄文	覆土下層	前期前葉
14・17	深鉢	横位の平行沈線と無節縄文地に雑な波状沈線	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
1	深鉢	コンパス文と単節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
20	深鉢	横位の沈線，無節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５
18	深鉢	半截竹管状工具による二段の横位結節沈線(沈線間は無文)・単節縄文	覆土下層	前期前葉　ＰＬ５

第４号住居跡（第８・９図）

位置　調査Ｉ区Ｂ１e3区に位置し，台地上平坦部に立地している。

規模と形状　南北長は約2.20mで，東西長は西側が調査区域外に延びており，約3.27mのみ確認され，平面形は方形と推定される。主軸方向は〔Ｎ－60°－Ｗ〕である。壁高は８～30cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

炉　北東壁寄りに付設された長径約60cm，短径約50cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さの地山面を使用し，赤変硬化している。

ピット　10か所。いずれも深さは約12～32cmと一定せず，配置も不規則であり，性格は不明である。

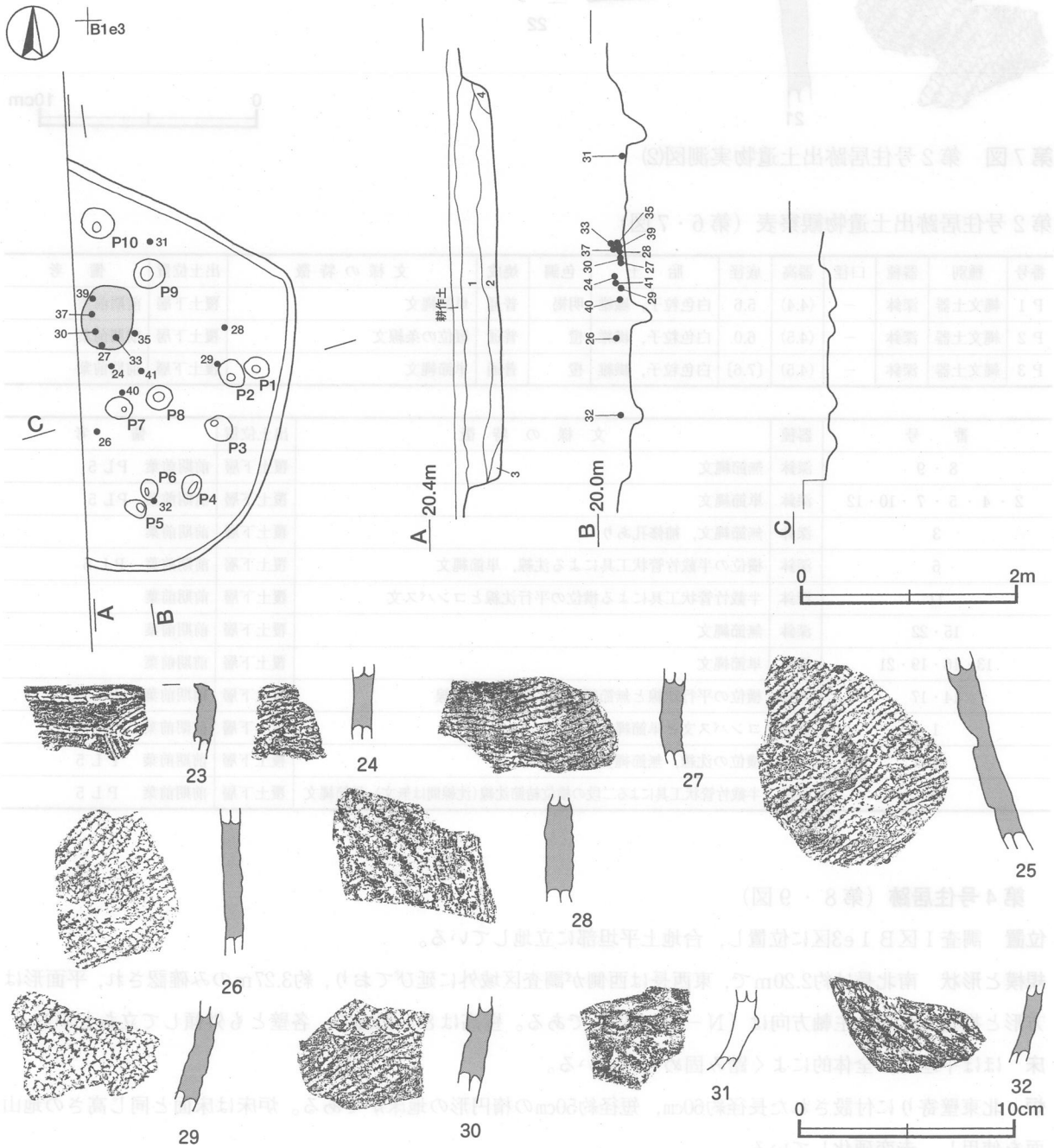
覆土　4層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

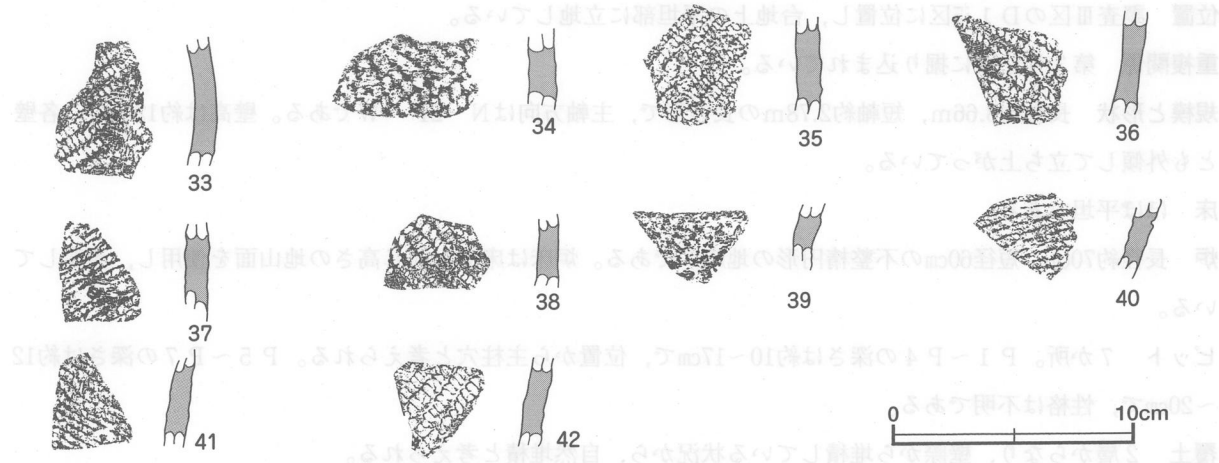
1	暗　褐　色	ローム粒子少量	3	褐　　色	ロームブロック少量
2	黒　褐　色	ローム粒子少量	4	暗　褐　色	ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片118点（深鉢）が出土している。炉内やその周辺にまとまっており，すべて覆土中層～下層からの出土である。すべて細片であり，住居廃絶後廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器及び遺構の形状から縄文時代前期前葉と考えられる。



第8図　第4号住居跡・出土遺物実測図

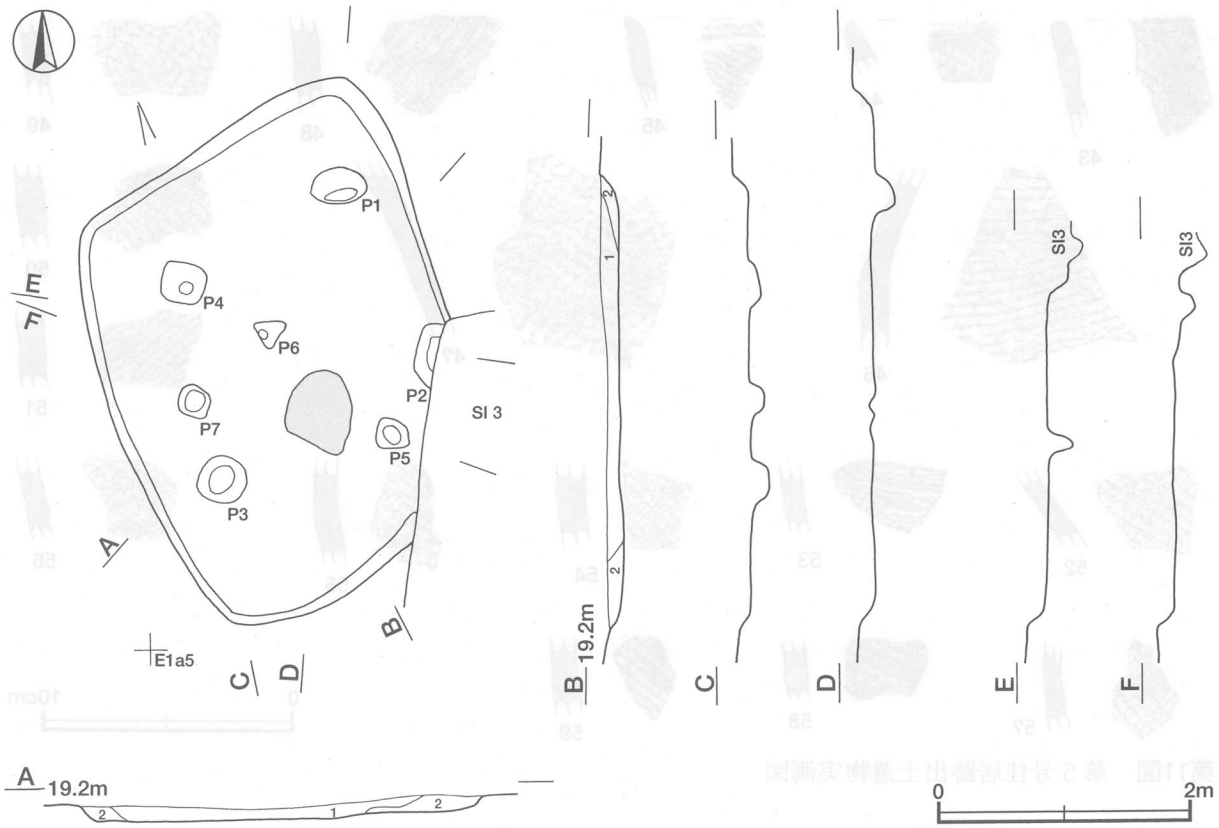


第９図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡遺物観察表(第８・９図)

番　　号	器種	文　様　の　特　徴	出土位置	備　　考
23	深鉢	半截竹管状工具による結節沈線と矢羽状沈線	覆　土	前期前葉　ＰＬ５
24・25・30・37	深鉢	異条縄文	覆土下層	前期前葉
31	深鉢	隆帯貼り付け	覆土下層	中期　混入
26～29・32～36・38～42	深鉢	単節縄文	覆土下層	前期前葉

第５号住居跡（第10・11図）



第10図　第５号住居跡実測図

位置　調査Ⅲ区のＤ１j5区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

重複関係　第３号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.66m，短軸約2.78mの長方形で，主軸方向はＮ－21°－Ｗである。壁高は約12cmで，各壁とも外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

炉　長径約70cm，短径60cmの不整楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さの地山面を使用し，赤変している。

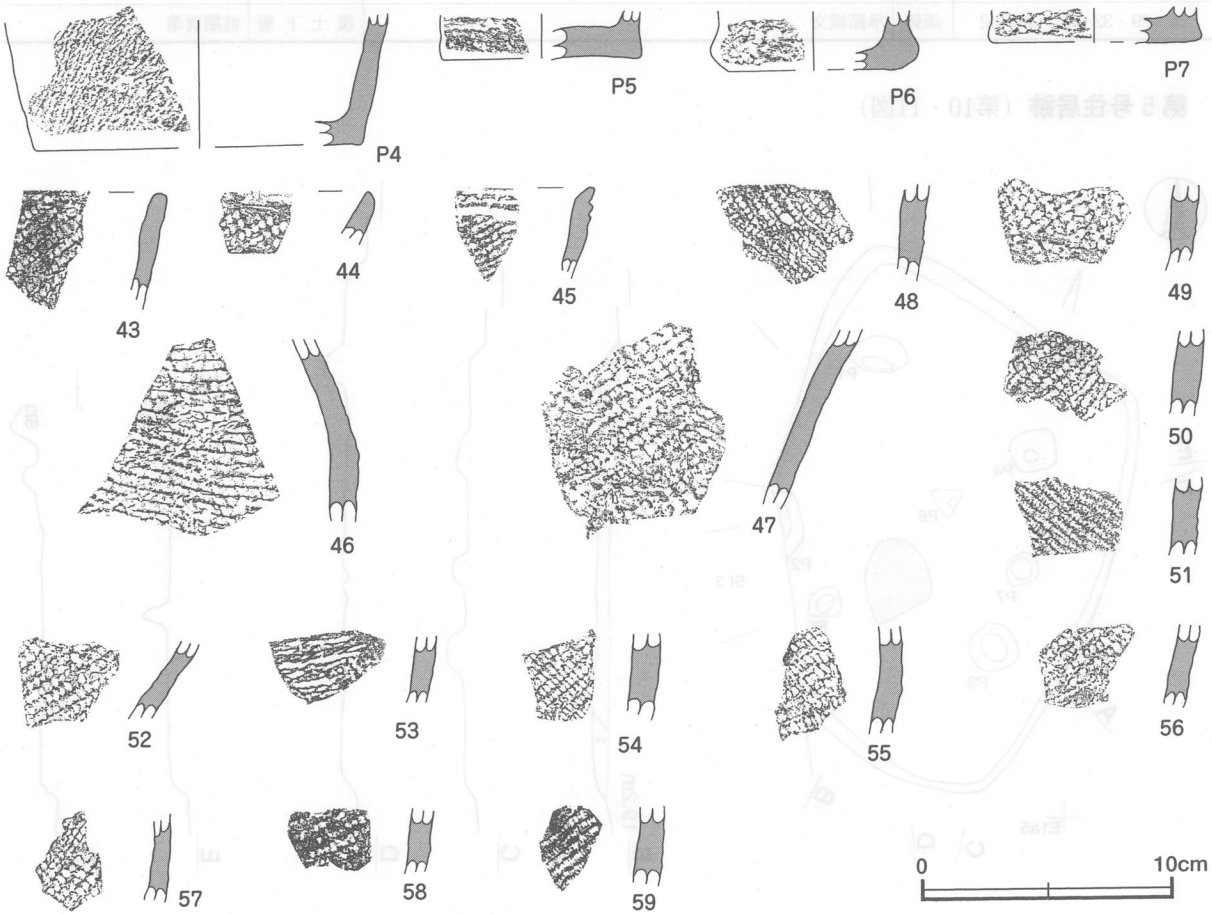
ピット　７か所。Ｐ１～Ｐ４の深さは約10～17cmで，位置から主柱穴と考えられる。Ｐ５～Ｐ７の深さは約12～20cmで，性格は不明である。

覆土　２層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片60点（深鉢）が出土している。すべて細片で覆土中からの出土であり，住居廃絶後廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器及び遺構の形状から縄文時代前期前葉と考えられる。



第11図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴	出土位置	備　考
Ｐ４	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	〔13.0〕	白色粒子，繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文	覆土	前期前葉
Ｐ５	縄文土器	深鉢	－	(1.8)	〔 8.0〕	白色粒子，繊維	褐	普通	単節縄文	覆土	前期前葉
Ｐ６	縄文土器	深鉢	－	(2.4)	〔 6.8〕	白色粒子，繊維	明赤褐	普通	単節縄文	覆土	前期前葉
Ｐ７	縄文土器	深鉢	－	(1.4)	〔 8.0〕	白色粒子，繊維	褐	普通	単節縄文	覆土	前期前葉

番　号	器種	文 様 の 特 徴	出 土 位 置	備　考
45	深鉢	口縁端部に横位の2本沈線，単節縄文	覆土	前期前葉
43・44・57・58	深鉢	単節縄文	覆土	前期前葉　同一個体カ
46・47～56・59	深鉢	単節縄文	覆土	前期前葉
48	深鉢	異条縄文	覆土	前期前葉

第６号住居跡（第12図）

位置　調査Ｉ区のＣ１a6区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

規模と形状　ほとんどが調査区域外に延びており，南北軸1.20m，東西軸0.80mだけ確認された。平面形は方形と推定される。主軸方向は不明である。壁高は約10cmで，各壁とも外傾して立ち上がっている。

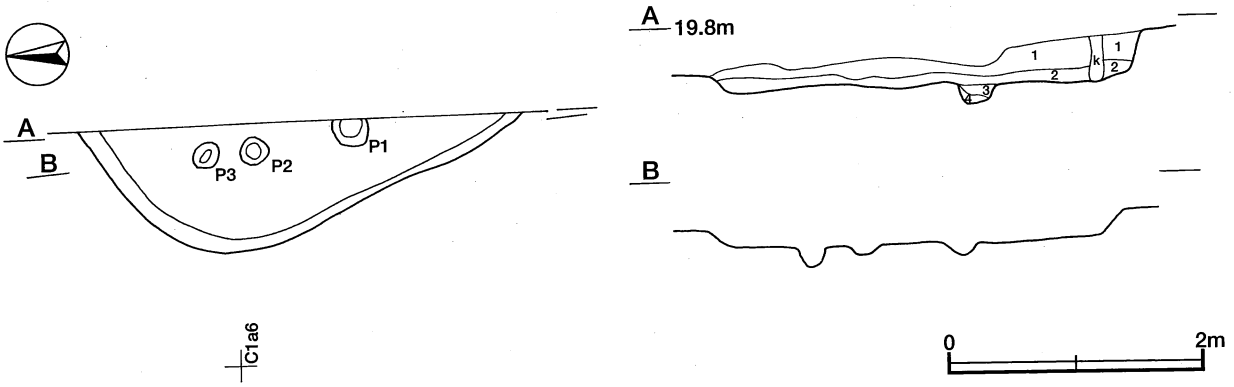
床　ほぼ平坦で，３つのピットの周辺がわずかに硬化している。

ピット　３か所。深さは約９～16cmと一定せず，性格は不明である。

覆土　４層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　　ロームブロック微量
4　褐　　色　　ロームブロック少量

所見　当遺跡の縄文時代の住居と形状が類似しているが，遺物が出土していないため時期は特定できない。



第12図　第６号住居跡実測図

２　古墳時代の遺構と遺物

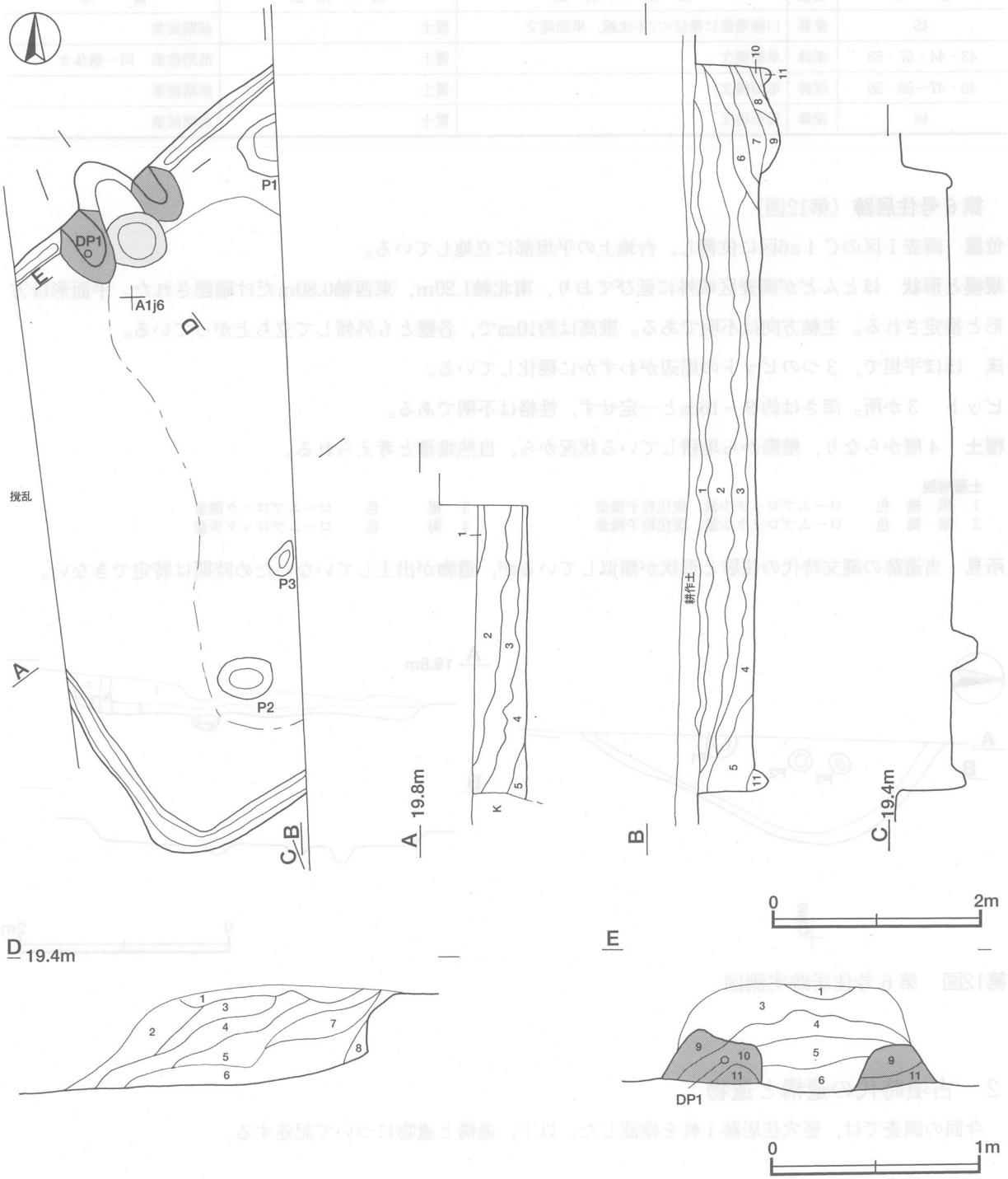
今回の調査では，竪穴住居跡１軒を確認した。以下，遺構と遺物について記述する。

第１号住居跡（第13・14図）

位置　Ａ１j6区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

規模と形状　北東壁が調査区域外に延び，南西壁のほとんどが撹乱により壊されている。南北軸約4.83m，東西軸2.50mだけが確認された。平面形は方形と推定される。主軸方向は〔N－35°－W〕である。壁高は20～25cmで，各壁とも垂直に立ち上がっている。

床　地山のローム層をそのまま床としている。ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。確認された壁には壁溝が巡っている。



第13図　第１号住居跡実測図

竈　北東壁の中央部に付設されている。焚口から煙道まで110cm，袖部幅45cm，壁外の掘り込みは50cmであり垂直に立ち上がっている。両袖の内側および火床面は赤変硬化しており，火床面は皿状に浅くくぼんでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。左袖内部にＤＰ１が埋め込まれており，支脚が袖の補強材として使用されたと考えられる。

竈土層解説

1	褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
3	赤褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
5	赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・砂粒少量
6	赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
7	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
9	明褐灰色	炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子微量（竈袖部）
10	明褐灰色	砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
11	明褐灰色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量，炭化粒子微量

ピット　３か所。Ｐ２の深さは24cmで，位置から主柱穴と考えられる。Ｐ１は位置から貯蔵穴と考えられる。Ｐ３は深さ30cmで，竈と対面する位置にあるが，中央部に寄りすぎていることから出入り口施設に伴うピットとは考えにくく，性格不明である。

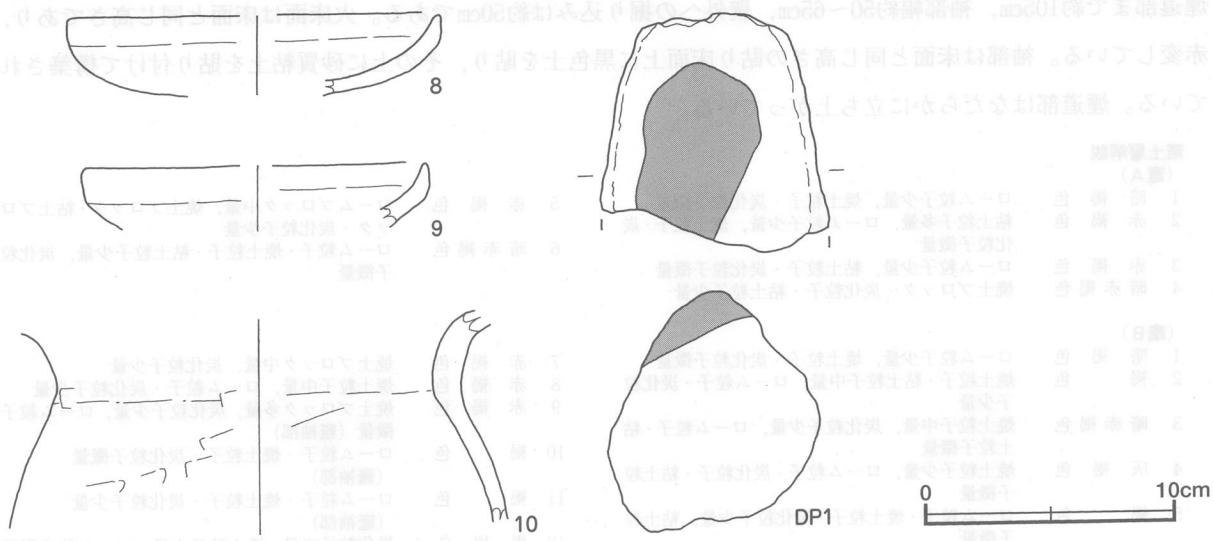
覆土　11層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
3	赤褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
6	褐　色	ローム粒子多量
7	赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
9	暗褐灰色	焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
10	暗褐灰色	焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
11	暗褐灰色	ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片29点（坏13，甕16），土製支脚１点，流れ込みと考えられる縄文土器片59点，撹乱による混入と考えられる陶器片１点が出土している。８・９・10は覆土中からの出土である。ＤＰ１は竈の左袖内部に埋め込まれており，補強材に転用されたと考えられる。

所見　時期は，住居に伴うものがないため特定できないが，本跡の規模及び形状と覆土中の遺物から７世紀ないしそれ以前と推定される。



第14図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
8	土師器	坏	〔14.8〕	(3.2)	－	透･赤･白色粒子	橙	普通	口縁部ヨコナデ	覆　土	10%
9	土師器	坏	〔13.6〕	(2.6)	－	赤色粒子	黄　橙	普通	口縁部ヨコナデ	覆　土	5％
10	土師器	甕	－	(8.5)	－	赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部外面ヘラケズリ後ヨコナデ，内面ヘラナデ	覆　土	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP1	支　脚	(9.6)	9.1	2.5	(445)	粘土	赤変　一部に粘土付着	竈袖内部	40%

3　奈良時代の遺構と遺物

今回の調査では，竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡２棟を確認した。以下，遺構と遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第３号住居跡（第15～17図）

位置　調査Ⅲ区のＤ１j5区に位置し，台地上平坦部に立地している。

重複関係　第５号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　南壁が調査区域外に延びている。南北軸約3.27m，東西軸2.13mが確認された。平面形は方形と推定される。主軸方向は〔Ｎ－３°－Ｅ〕である。壁高は55cmほどで，各壁とも垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部はよく踏み固められており，壁溝が巡っている。

竈　新旧２つの竈が確認された。壁溝が北壁中央部に付設されている竈Ａを壊していることや，北東コーナーに付設されている竈Ｂの下から，Ｐ３と対応し主柱穴と考えられるＰ４が確認されたことから，北壁にある竈Ａから北東コーナーの竈Ｂへ造りかえられたと考えられる。竈Ａは焚口から煙道部まで約150cm，壁外の掘り込みは約100cmである。火床面は赤変している。煙道部はなだらかに立ち上がっている。竈内土層は砂質粘土を含んでおり，竈を造りかえる時に竈構築材を埋め込んで壁構築土としたものと考えられる。竈Ｂは焚口から煙道部まで約105cm，袖部幅約50～65cm，壁外への掘り込みは約50cmである。火床面は床面と同じ高さであり，赤変している。袖部は床面と同じ高さの貼り床面上に黒色土を貼り，その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。煙道部はなだらかに立ち上がっている。

竈土層解説

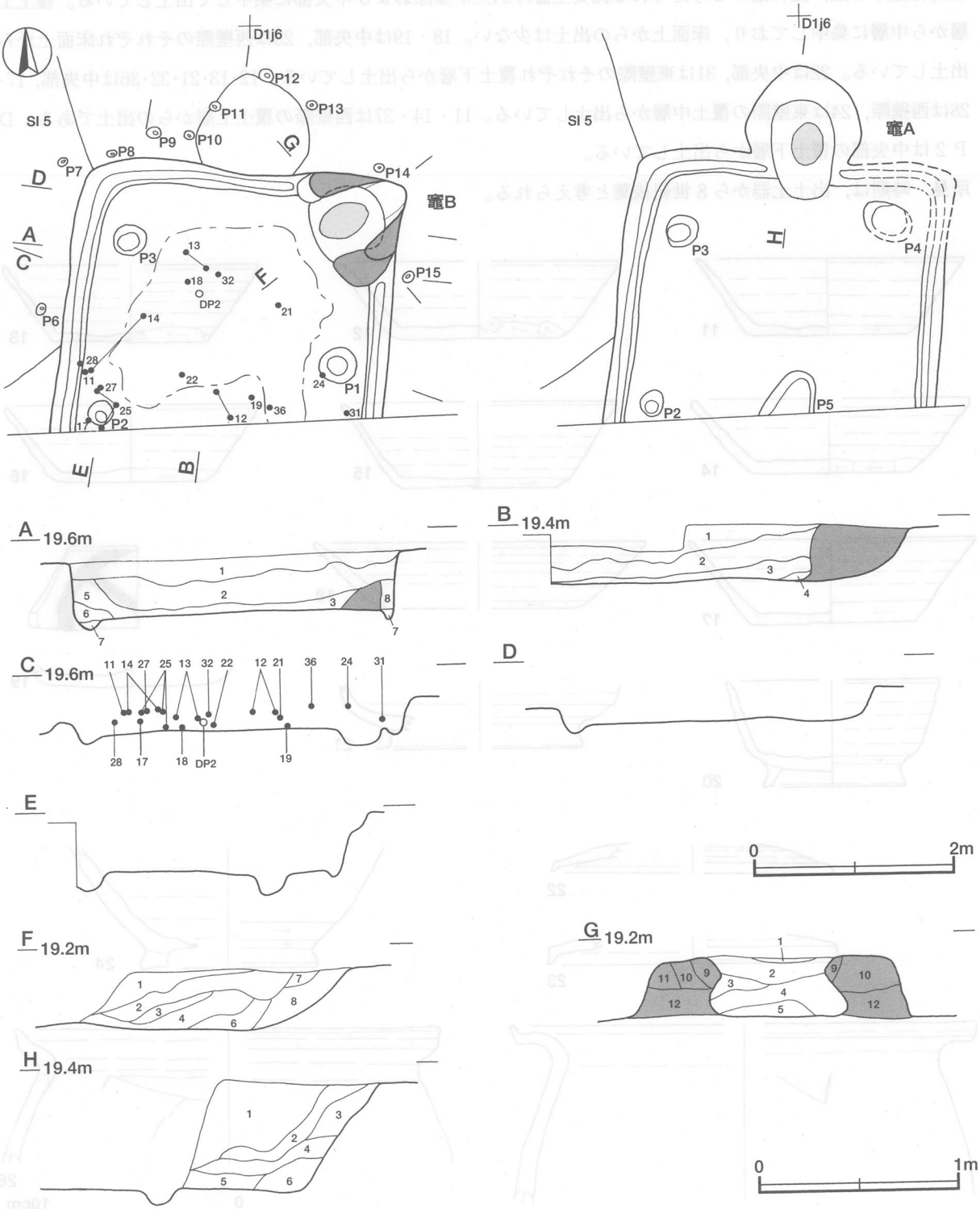
（竈Ａ）

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　赤　褐　色　粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　赤　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
5　赤　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量

（竈Ｂ）

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　焼土粒子・粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子微量
4　灰　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
6　赤　褐　色　焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子微量
7　赤　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量
8　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
9　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量（竈袖部）
10　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量（竈袖部）
11　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量（竈袖部）
12　黒　褐　色　炭化粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量（竈袖部）

ピット　15か所。竈Ａが使用されていた時の主柱穴はＰ２～Ｐ４が相当し，深さは18～20cmである。竈Ｂが付設された時Ｐ２・Ｐ３はそのまま使用され，Ｐ１が新しく掘り込まれたと推定される。深さは17cmである。Ｐ５～Ｐ15は壁外柱穴であり，深さは10～20cmである。これらのピットは竈Ａを掘り込んでおり，竈Ｂを構築した時に一緒に掘り込まれたものと推定される。



第15図　第３号住居跡実測図

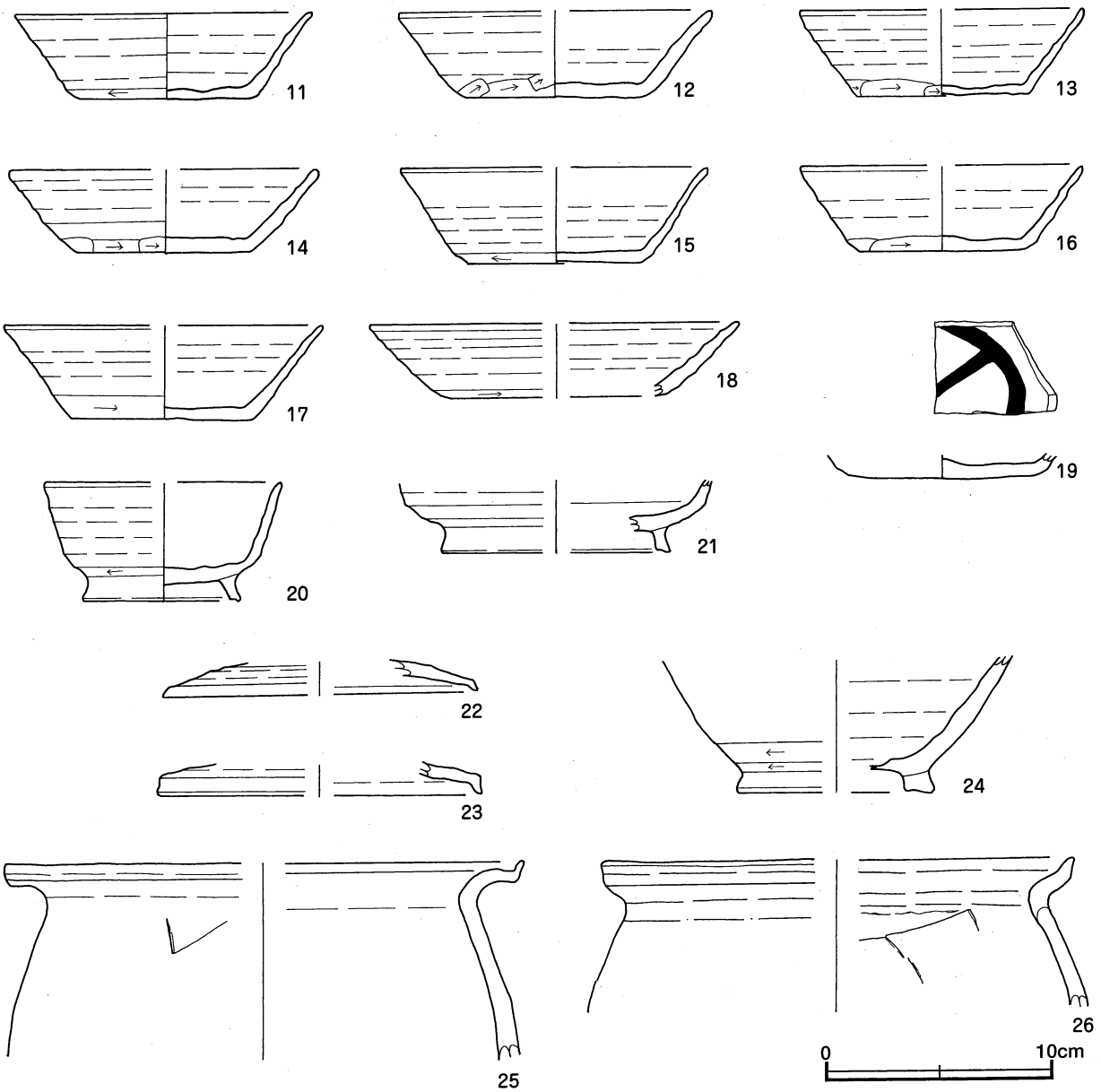
覆土　8層からなり，壁際から堆積している状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

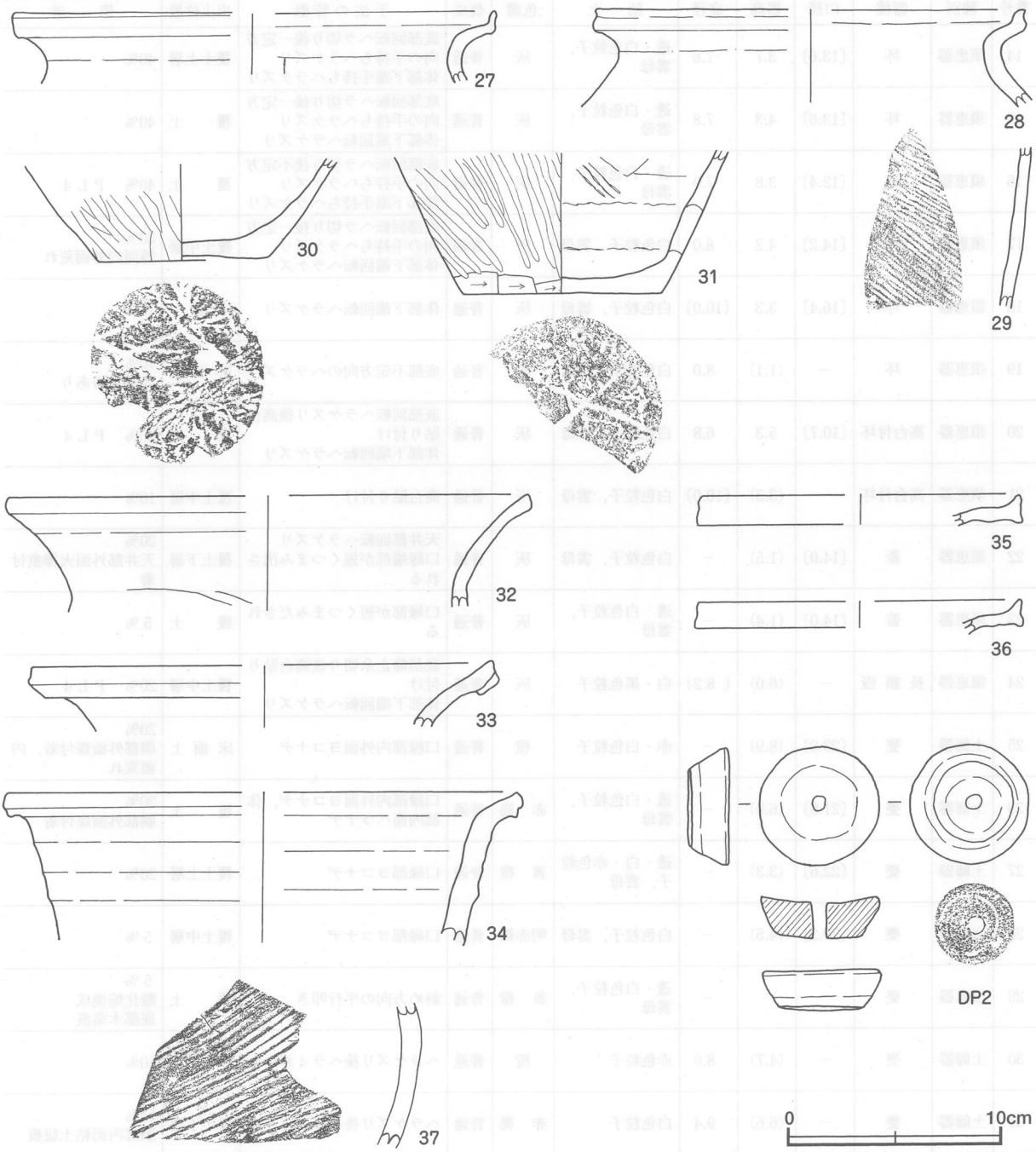
1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6	極暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
3	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片311点（坏64，甕247），須恵器片470点（坏366，高台付坏5，壺4，蓋32，甕63），須恵質紡錘車1点，流れ込みと考えられる縄文土器片34点が壁際および中央部に集中して出土している。覆土上層から中層に集中しており，床面上からの出土は少ない。18・19は中央部，25は西壁際のそれぞれ床面上から出土している。22は中央部，31は東壁際のそれぞれ覆土下層から出土している。12・13・21・32・36は中央部，17・28は西壁際，24は東壁際の覆土中層から出土している。11・14・27は西壁際の覆土上層からの出土である。DP2は中央部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第16図　第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図　第３号住居跡出土遺物実測図(2)

第３号住居跡出土遺物観察表（第16・17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
11	須恵器	坏	13.2	3.8	7.7	透・白色粒子，雲母	灰	普通	底部手持ちヘラ切り後一定方向手持ちヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	覆土上層	70% 器面内外面荒れ ＰＬ４
12	須恵器	坏	〔13.8〕	3.8	8.0	透・白色粒子，雲母	灰	普通	底部手持ちヘラ切り後一定方向手持ちヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	覆土中層	50%　ＰＬ４
13	須恵器	坏	〔12.6〕	3.8	7.6	白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後不定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ	覆土中層	50%　ＰＬ４

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
14	須恵器	坏	〔13.6〕	3.7	7.6	透・白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後一定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ	覆土上層	40%
15	須恵器	坏	〔13.6〕	4.3	7.8	透・白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後一定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	覆　土	40%
16	須恵器	坏	〔12.4〕	3.8	7.0	透・白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後不定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ	覆　土	40%　ＰＬ４
17	須恵器	坏	〔14.2〕	4.2	8.0	白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後一定方向の手持ちヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	覆土中層	30% 器面内外面荒れ
18	須恵器	坏	〔16.4〕	3.3	〔10.0〕	白色粒子，雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラケズリ	床 面 上	25%
19	須恵器	坏	－	(1.1)	8.0	白色粒子，雲母	灰	普通	底部不定方向のヘラケズリ	床 面 上	10% 底部墨書あり
20	須恵器	高台付坏	〔10.7〕	5.3	6.8	白色粒子，雲母	灰	普通	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け 体部下端回転ヘラケズリ	覆　土	40%　ＰＬ４
21	須恵器	高台付坏	－	(3.3)	〔10.0〕	白色粒子，雲母	灰	普通	高台貼り付け	覆土中層	10%
22	須恵器	蓋	〔14.0〕	(1.5)	－	白色粒子，雲母	灰	普通	天井部回転ヘラケズリ 口縁端部が短くつまみ出される	覆土下層	20% 天井部外面火襷痕付着
23	須恵器	蓋	〔14.0〕	(1.4)	－	透・白色粒子，雲母	灰	普通	口縁部が短くつまみだされる	覆　土	５％
24	須恵器	長 頸 壺	－	(6.0)	〔 8.2〕	白・黒色粒子	灰	普通	底部静止糸切り後高台貼り付け 体部下端回転ヘラケズリ	覆土中層	20%　ＰＬ４
25	土師器	甕	〔23.0〕	(8.9)	－	赤・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ	床 面 上	20% 胴部外面煤付着，内面荒れ
26	土師器	甕	〔21.0〕	(6.9)	－	透・白色粒子，雲母	赤　褐	普通	口縁部内外面ヨコナデ，体部内面ヘラナデ	覆　土	20% 胴部外面煤付着
27	土師器	甕	〔22.6〕	(3.3)	－	透・白・赤色粒子，雲母	黄　橙	普通	口縁部ヨコナデ	覆土上層	20%
28	土師器	甕	〔20.2〕	(4.5)	－	白色粒子，雲母	明赤褐	普通	口縁部ヨコナデ	覆土中層	５％
29	須恵器	甕	－	－	－	透・白色粒子，雲母	黄　橙	普通	斜め方向の平行叩き	覆　土	５％ 酸化焔焼成 底部木葉痕
30	土師器	甕	－	(4.7)	8.0	赤色粒子	橙	普通	ヘラケズリ後ヘラミガキ	覆　土	10%
31	土師器	甕	－	(6.6)	9.4	白色粒子	赤　褐	普通	ヘラケズリ後ヘラミガキ	覆土下層	15% 胴部内面粘土紐痕
32	須恵器	甕	〔24.2〕	(5.3)	－	白・赤色粒子，雲母	灰	普通	口縁部ヨコナデ，口縁部断面三角形	覆土中層	５％
33	須恵器	甕	〔21.4〕	(3.0)	－	透色粒子，雲母	灰 オリーブ	普通	口縁端部外側に折り返し	覆　土	５％
34	須恵器	甕	〔24.0〕	(7.2)	－	透色粒子，雲母	灰	普通	口縁端部断面三角形	覆　土	５％
35	須恵器	長 頸 壺	〔15.0〕	(1.4)	－	白色粒子	灰	普通	口縁端部断面三角形	覆　土	５％ 内側に自然釉
36	須恵器	長 頸 壺	〔15.0〕	(1.4)	－	白色粒子	灰	普通	口縁端部断面三角形	覆　土	５％ 外側に自然釉
37	須恵器	甕	－	－	－	白色粒子	灰	普通	体部斜め方向の平行叩き	覆　土	５％

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP2	紡錘車	上5.5 下3.8	0.7	1.9	64.0	粘土	断面逆台形 側面・下面に自然釉付着 黒色粒子の噴き出し	覆土下層	100% 須恵質　ＰＬ５

⑵　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第18図）

位置　調査Ⅲ区のＤ１h6区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

規模と構造　北側と西側が調査区域外に延びており全容はわからないが，確認された柱間寸法はすべて3.27m（10尺）を基調としている。また第２号掘立柱建物跡と軸線が揃うと推定するならば，同様な構造の建物と考えられる。

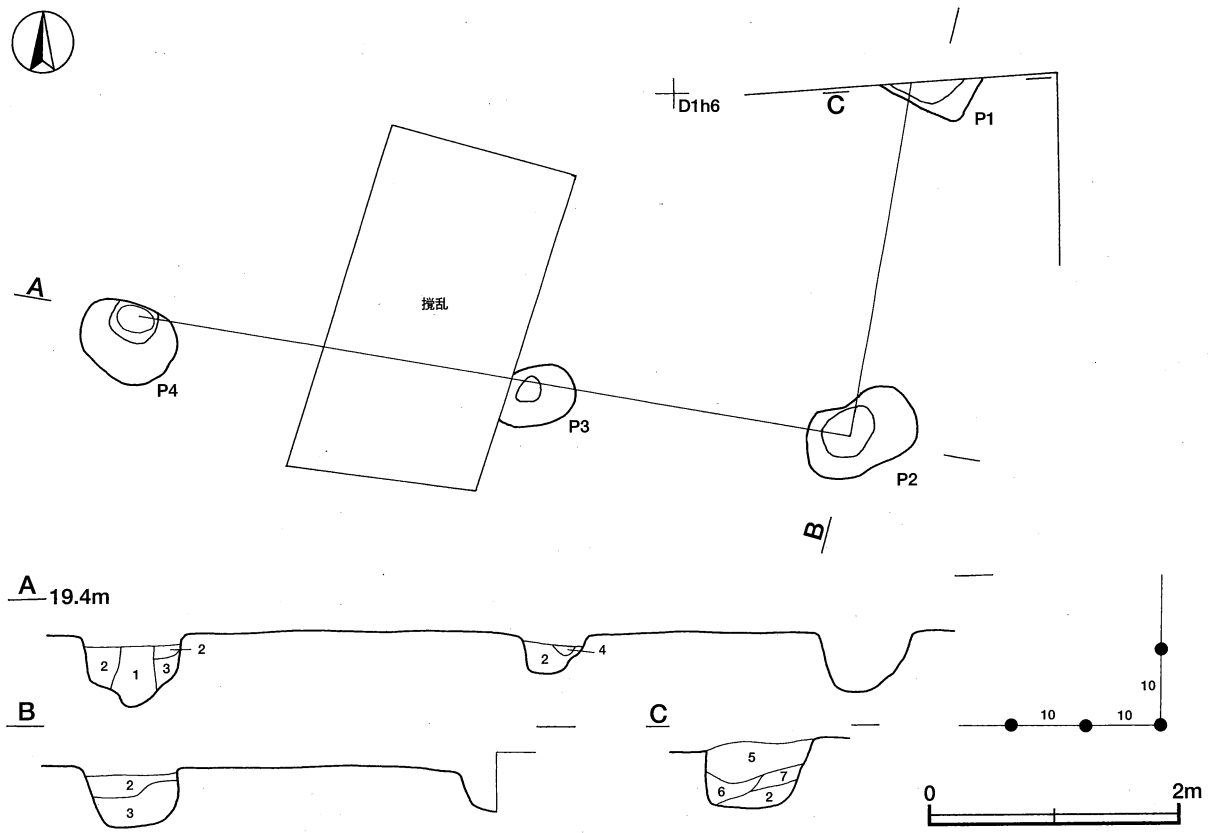
柱穴　平面形は隅丸方形を呈し，深さは20～60cmで一律ではない。柱抜き取り痕は第１層が相当し，しまりが弱い。その他の層は埋土であり，ローム土を主体とした土で突き固められており，互層になっている。

土層解説（各柱穴共通）

1　黒　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　　色　　ローム粒子中量
5　黒　　色　　ロームブロック多量，炭化粒子微量
6　褐　　色　　ロームブロック多量
7　暗　褐　色　　ローム粒子少量

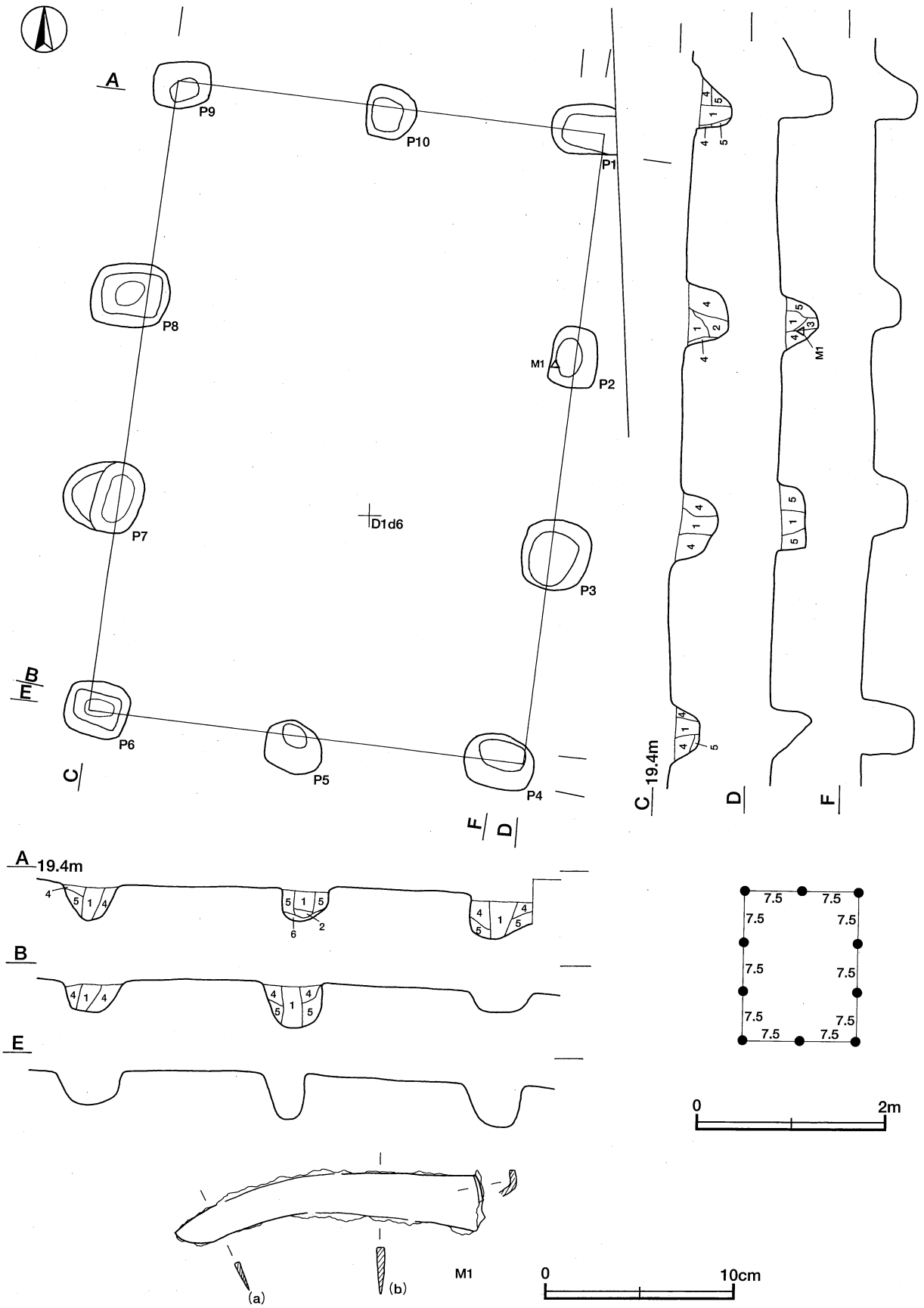
遺物出土状況　出土していない。

所見　出土遺物がないため時期は特定できないが，第３号住居跡や第１号掘立柱建物跡と軸線が合っていることから，それらと同時期と推定される。



第18図　第１号掘立柱建物跡実測図

第２号掘立柱建物跡（第19図）



第19図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

位置　調査Ⅱ区のＤ１c5区に位置し，台地上の平坦部に立地している。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱式の建物跡で，桁行方向はＮ－６°－Ｅの南北棟である。規模は桁行長6.81m，梁行長4.54mであり，柱間寸法は桁行・梁行ともに2.27m（7.5尺）を基調としている。

柱穴　平面形は隅丸方形を呈し，深さは約20～60cmで一律ではない。柱抜き取り痕は第１・５層が相当し，しまりが弱い。その他の層は埋土であり，ローム土を主体とした土で突き固められており，互層になっている。

土層解説（各柱穴共通）

1　黒　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子少量
2　褐　　色　　ローム粒子多量
3　黒　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　　ロームブロック多量
5　暗　褐　色　　ローム粒子中量
6　暗　褐　色　　ローム粒子少量

遺物出土状況　Ｐ２の埋土中層から鉄鎌が出土している。

所見　第３号住居跡と軸線を意識した配置であることと，出土遺物から８世紀後葉と考えられる。

第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　　考
M1	鎌	16.2	(a) 1.7 (b) 2.4	(a) 0.3 (b) 0.4	42.9	鉄	曲刃鎌　基部折り返し	Ｐ２埋土	100%　ＰＬ５

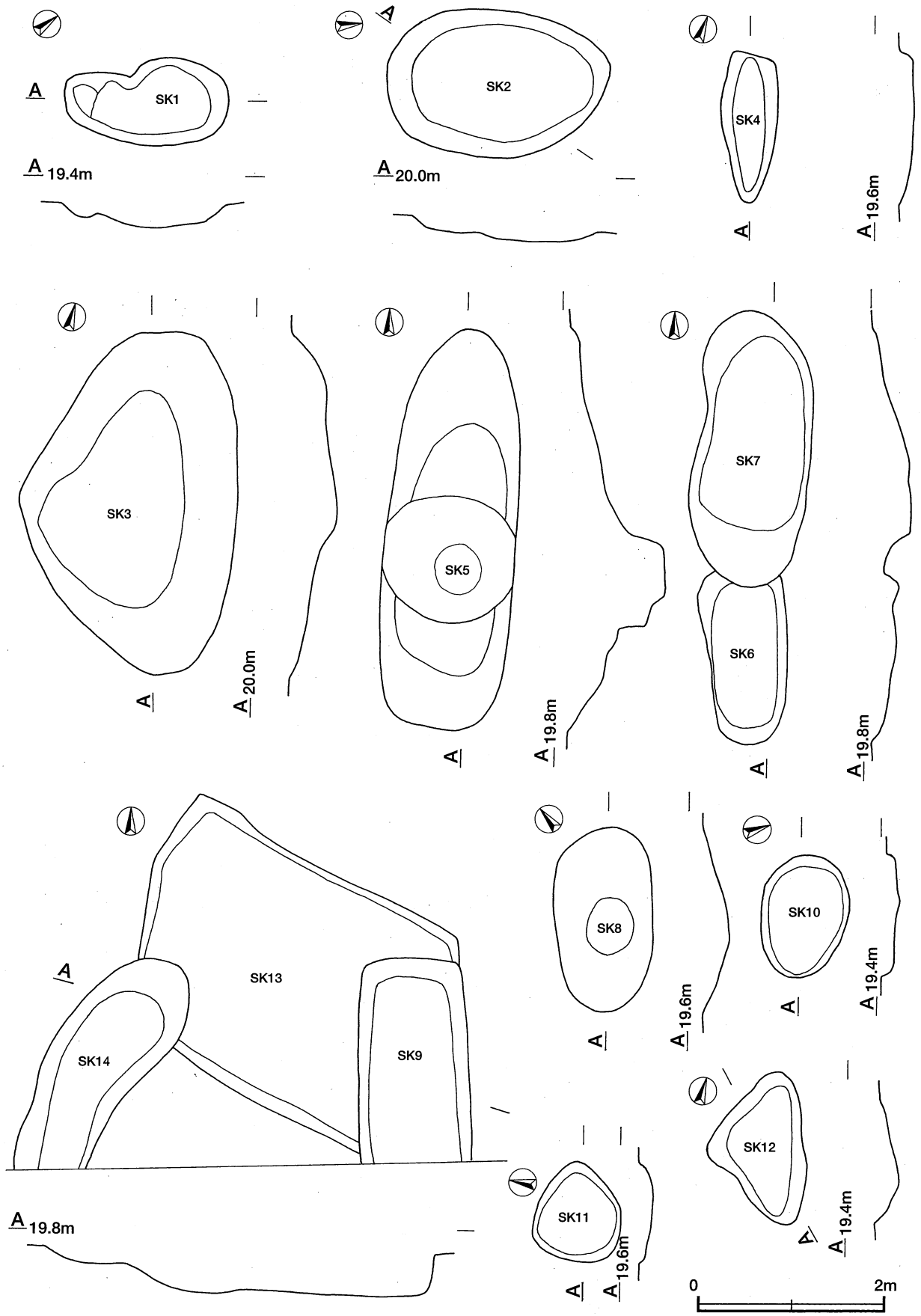
4　その他の遺構と遺物

今回の調査では，時期及び性格不明の土坑14基を確認したので，実測図を掲載する。また試掘，表土除去，遺構確認の段階で，遺構に伴わない旧石器時代から古代にかけての遺物が出土している。以下，特色ある遺物を抽出し，実測図を掲載する。

(1)　土坑（第20図）

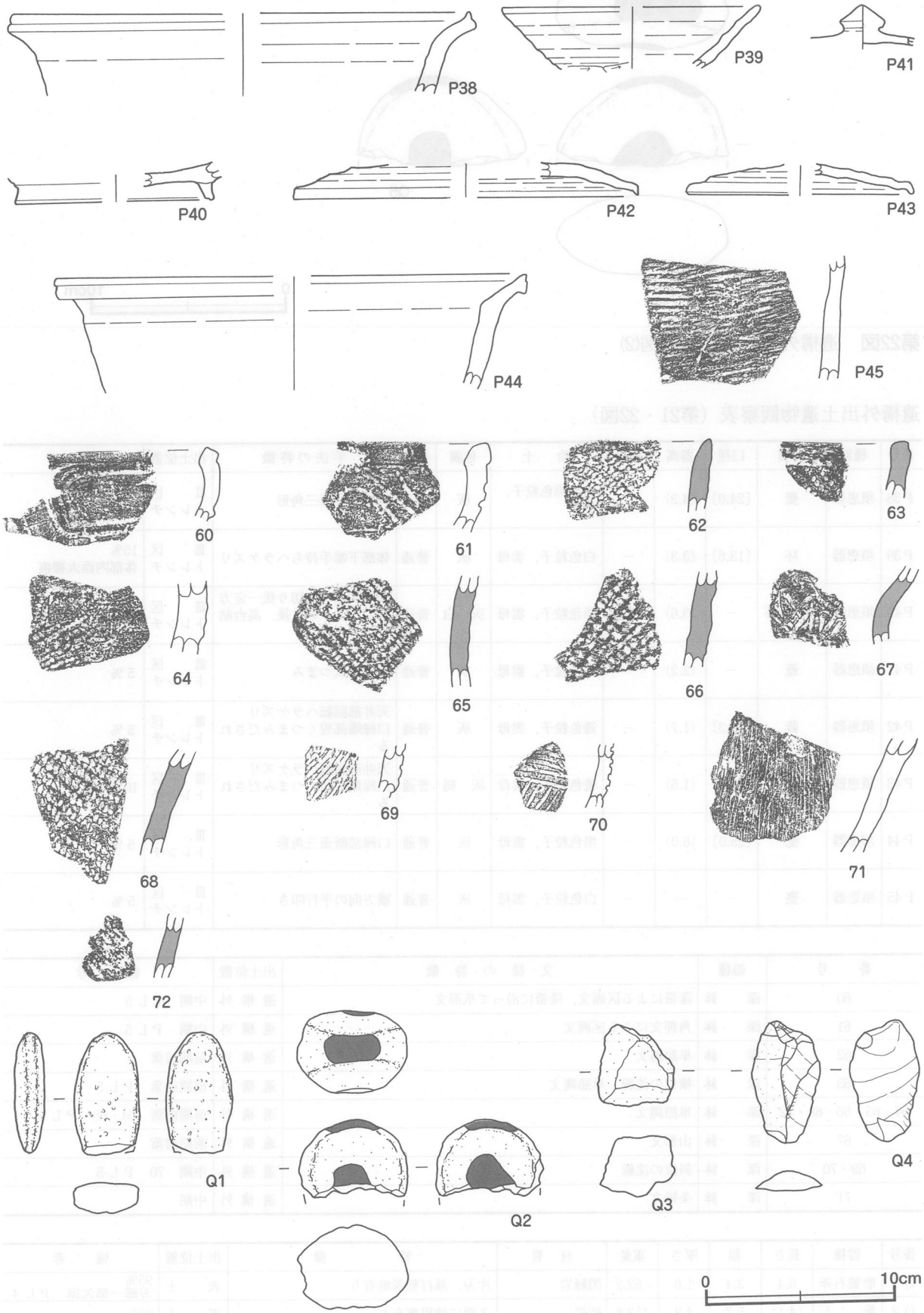
表２　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径(軸)×短径(軸)(m)	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係（古→新）
1	D1e4	N－40°－E	不整形	1.78 × 0.94	20	緩斜	平坦	自然	－	
2	B1i4	N－5°－E	楕円形	2.37 × 1.60	14	緩斜	平坦	自然	－	
3	B1a3	N－14°－W	不整形	3.70 × 2.34	53	緩斜	平坦	自然	－	
4	B1a4	N－16°－W	楕円形	1.65 × 0.60	17	外傾	平坦	自然	－	
5	B1e4	N－0°	楕円形	4.35 × 1.43	54	緩斜	平坦	自然	－	
6	B1e3	N－0°	楕円形	(1.72)× 0.82	26	緩斜	平坦	自然	－	本跡→ＳＫ７
7	B1d3	N－6°－E	楕円形	2.95 × 1.20	43	緩斜	平坦	自然	－	ＳＫ６→本跡
8	B1d5	N－49°－E	楕円形	2.00 × 1.04	27	外傾	平坦	自然	－	
9	C1a3	N－3°－W	〔長方形〕	(2.18)× 1.20	42	外傾	平坦	自然	－	ＳＫ13→本跡
10	B1j5	N－70°－W	楕円形	1.35 × 0.93	13	外傾	平坦	自然	－	
11	B1j5	N－82°－E	楕円形	1.13 × 0.95	12	外傾	平坦	自然	－	
12	D1i6	N－14°－W	不整形	1.65 × 1.07	22	緩斜	平坦	自然	－	
13	C1a4	N－25°－E	〔方　形〕	(3.35)×(2.53)	47	緩斜	平坦	自然	－	本跡→ＳＫ９・ＳＫ14
14	C1a3	N－62°－W	〔楕円形〕	(2.44)× 1.05	17	緩斜	平坦	自然	－	

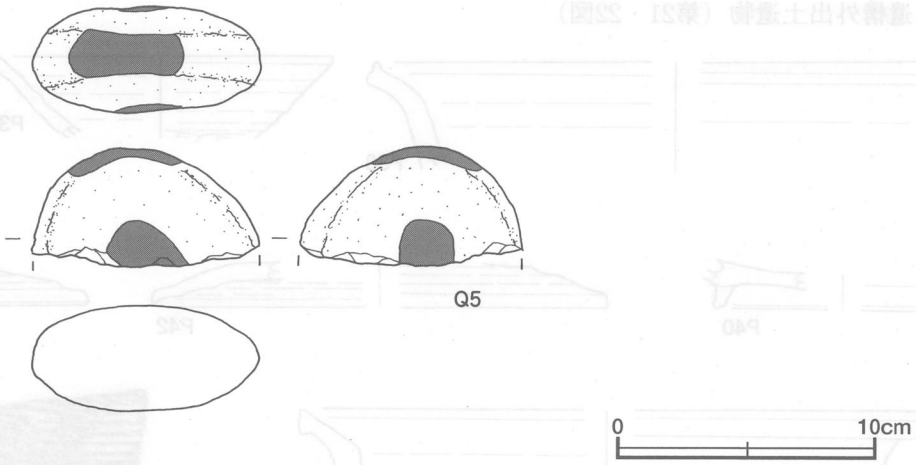


第20図　第１～14号土坑実測図

⑵　遺構外出土遺物（第21・22図）



第21図　遺構外出土遺物実測図(1)



第22図　遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第21・22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
P38	須恵器	甕	〔24.0〕	(4.2)	－	白・黒色粒子，雲母	灰	普通	口縁部断面三角形	Ⅱ区トレンチ	5％
P39	須恵器	坏	〔13.6〕	(3.3)	－	白色粒子，雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラケズリ	Ⅲ区トレンチ	15％ 体部内面火襷痕
P40	須恵器	高台付坏	－	(3.6)	〔10.6〕	黒色粒子，雲母	灰　白	普通	底部回転ヘラ切り後一定方向のヘラケズリ後，高台貼り付け	Ⅲ区トレンチ	10％
P41	須恵器	蓋	－	(2.2)	－	白色粒子，雲母	灰	普通	擬宝珠状つまみ	Ⅲ区トレンチ	5％
P42	須恵器	蓋	〔18.2〕	(1.7)	－	透色粒子，雲母	灰	普通	天井部回転ヘラケズリ 口縁端部短くつまみだされる	Ⅲ区トレンチ	5％
P43	須恵器	蓋	〔12.0〕	(1.5)	－	透色粒子，雲母	灰　褐	普通	天井部回転ヘラケズリ 口縁端部短くつまみだされる	Ⅲ区トレンチ	10％
P44	須恵器	甕	〔25.0〕	(6.0)	－	黒色粒子，雲母	灰	普通	口縁部断面三角形	Ⅲ区トレンチ	5％
P45	須恵器	甕	－	－	－	白色粒子，雲母	灰	普通	横方向の平行叩き	Ⅲ区トレンチ	5％

番　号	器種	文様の特徴	出土位置	備　考
60	深　鉢	隆帯による区画文，隆帯に沿って爪形文	遺構外	中期　ＰＬ５
61	深　鉢	角押文による区画文	遺構外	中期　ＰＬ５
62	深　鉢	単節縄文	遺構外	前期前葉
63	深　鉢	横位の沈線，単節縄文	遺構外	前期前葉　ＰＬ５
64・65・66・68・72	深　鉢	単節縄文	遺構外	前期前葉　64・68　ＰＬ５
67	深　鉢	山形文	遺構外	前期前葉
69・70	深　鉢	斜位の沈線	遺構外	中期　70　ＰＬ５
71	深　鉢	条線文	遺構外	中期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ１	磨製石斧	6.4	3.4	1.6	52.2	閃緑岩	片刃，敲打整形痕有り	表　土	95％ 刃部一部欠損　ＰＬ４
Ｑ２	敲　石	(4.1)	5.7	4.3	113.6	砂岩	３面に使用痕有り	表　土	80％

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	軽石	4.4	4.0	3.3	35.7	軽石	表面に磨耗痕有り	表土	90%
Q4	剥片	6.5	3.7	1.0	26.3	砂岩	縦長剥片，背面に自然面有り	表土	100% PL5
Q5	敲石	4.7	8.7	4.0	197.5	砂岩	3面に使用痕有り	表土	50% PL4

表3　住居一覧表

住居跡番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(古→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	A1j6	〔N−35°−W〕	〔方形〕	(4.83)×(2.50)	20～25	平坦	一部	1	−	2	1	1	自然	土師器，土製支脚	7世紀代カ	
2	B1d6	N−21°−E	〔隅丸方形〕	5.61×4.45	2～6	平坦	−	−	−	6	1	−	自然	縄文土器（深鉢）	縄文前期前葉	
3	D1j5	〔N−3°−E〕	〔方形〕	3.27×(2.13)	55	平坦	〔全周〕	3	−	12	2	−	自然	土師器，須恵器，紡錘車	8世紀後葉	SI5→本跡
4	B1e3	〔N−60°−W〕	〔方形〕	(2.20)×3.27	8～30	平坦	−	−	−	10	1	−	自然	縄文土器（深鉢）	縄文前期前葉	
5	D1j5	N−21°−W	〔長方形〕	3.66×2.78	12	平坦	−	4	−	3	1	−	自然	縄文土器（深鉢）	縄文前期前葉	本跡→SI3
6	C1a6	−	〔方形〕	(1.20)×(0.80)	10	平坦	−	−	−	3	−	−	自然		縄文前期前葉	

表4　掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	桁×梁(間)	規模(m)	面積(㎡)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	柱穴(cm)						出土遺物	時期
								構造	柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ		
1	D1h6	−	−	−	−	3.27	3.27	側柱	4	隅丸方形	70～90	50～60	20～60	−	8世紀後葉カ
2	D1c5	N−6°−E	3×2	6.81×4.54	30.9	2.27	2.27	側柱	10	隅丸方形	60～70	60	20～60	曲刃鎌	8世紀後葉

第4節　ま　と　め

今回の調査は袋内A遺跡全体の一部分にすぎず，各時代の集落跡はさらに広がっているものと考えられる。ここでは確認した縄文時代の集落について県内の遺跡と比較しながら概要を述べ，まとめとしたい。

1　縄文時代

前期前葉の竪穴住居跡が4軒確認された。瓦吹堅氏は，「前期前葉の集落跡の調査例は，早期よりも増加し，その規模も拡大傾向にある」とし，前期を茨城県縄文時代集落変遷の第2期にしている[1)]。県内の縄文時代前期集落をみてみると，土浦市下郷遺跡・下郷古墳群は田村川によって開析され，細長い馬の背状を呈した標高26～27mの台地上に立地している。1997年に当財団で[2)]，2000年には下郷古墳遺跡調査会が発掘調査している[3)]。財団が確認した当該域の住居は，前期前半の花積下層式期7軒，黒浜式期13軒，前期後半の浮島期13軒，粟島台式期7軒が確認されており，それぞれⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期，Ⅳ期に区分されている。Ⅰ期花積下層式期は，重複関係から時間差も想定しなければならないが，「各住居跡は小規模ながら集落規模は拡大傾向にあり，弧状の住居分布を示している」[4)]。Ⅱ期の黒浜式期は，「集落規模がより拡大する傾向と環状の住居配置が意識された集落形態を示している」[5)]。竪穴住居の平面形態は，Ⅰ期・Ⅱ期ともに長方形状で，貝塚は伴っていない。南小割遺跡[6)]は東茨城郡茨城町大字駒渡字南小割に所在しており，涸沼川左岸の標高24～26mの河岸段丘上に立地している。前期前葉の二ツ木式期の住居跡が11軒，関山式期の住居跡9軒が確認されており，異なる集落配置をしている。二ツ木式期の住居群は台地縁辺部に，関山式期の住居群は台地中央部にあり，両住居間の重複はみら

れない。両群はそれぞれ中央に広場を持ち，環状の住居配置が指摘されている[7]。竪穴住居の平面形態は隅丸長方形・隅丸方形・楕円形の３タイプに分類されている。二ツ木式土器が出土している汽水性のヤマトシジミを主体とした地点貝塚が６か所確認されている。石畑遺跡[8] は五霞村新幸谷に所在し，権現堂川流域の標高13ｍほどである低台地の谷頭部に立地している。前期に属する住居跡は５軒確認され，重複しているものもそれほどの時間差はないと報告されており，前期前葉黒浜式期の住居群と考えられている。竪穴住居の平面形態は長方形であり，ヤマトシジミの地点貝塚が１か所確認されている。平成14年度に当財団で調査した霞ヶ浦町戸崎中山遺跡でも前期前葉の住居が10軒ほど確認されている[9]。県内の縄文時代前期前葉集落を概観してみたが，それらと前期前葉黒浜式期の袋内Ａ遺跡を比較してみると，住居の平面形態は長方形状で同じであり，当該期の一般的な形態である。集落規模は部分的な調査のためわからないが，類例と合わせて考えると小規模なものと推定される。今回の調査では貝塚は確認されなかった。調査区域外に存在する可能性はあるが，縄文海進により海産資源が豊富であり，採取も容易であったはずの当該地域において，貝類は必ずしも絶対不可欠な食料ではなかったと推定される。このことについては，奥東京湾の前期集落と生業について論じた小川岳人氏も，「採取対象の選択肢の（極めて重要な一角を担うものではあるだろうが）一つにすぎない」とし，磨石・敲石類・石皿類が安定的に出土している事から，「メジャーフードとして高い利用が想定されるのは堅果類であり，組成中で安定的な存在である磨石・石皿類をその加工・処理具とすれば整合的である」[10] と指摘している。当遺跡では敲石が２点出土しているがいずれも遺構に伴うものでなく，時期も不明である[11]。県内では下郷遺跡・下郷古墳群の財団調査エリアから確認された前期前葉の住居跡から石鏃13点，磨石２点，打製石斧１点が，南小割遺跡では石鏃４点，磨石２点，敲石３点，打製石斧1点，石皿２点，石匙１点が出土している[12]。資料数が少ないので推測の域は出ないが，県内の前期集落も奥東京湾同様の事が考えられる。

註

1）瓦吹氏は，「第２期は前期にその様相がみられるように定住的な集落の形成された時期で，すでに環状の集落意識がうかがえる時期である」と指摘している。瓦吹堅「茨城県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会　第１回研究集会基礎資料集　2001年

2）平石尚和「下郷古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第167集　㈶茨城県教育財団　2000年

3）関口　満『下郷遺跡・下郷古墳群』土浦市教育委員会　2001年

4）註２と同じ

5）註２と同じ

6）中村敬治・江幡良夫「南小割遺跡　権現堂遺跡　親塚古墳　後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集　㈶茨城県教育財団　1998年

7）註２と同じ

8）瓦吹　堅『石畑遺跡』　五霞村教育委員会　1997年

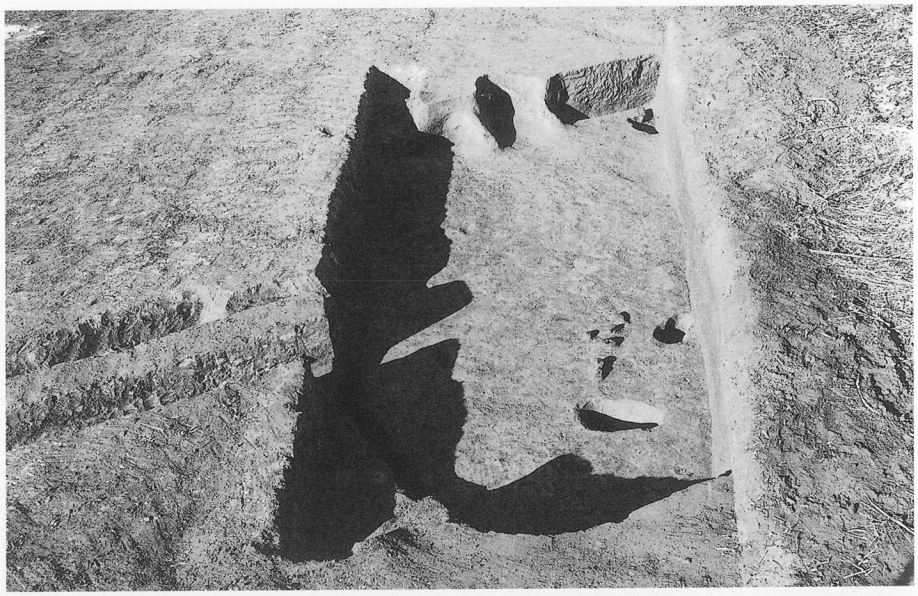
9）現在整理作業中であり，平成15年度刊行予定である。

10）小川岳人『縄文時代の生業と集落』株式会社ミュゼ　2001年

11）中期の土器も遺構外であるが出土している。

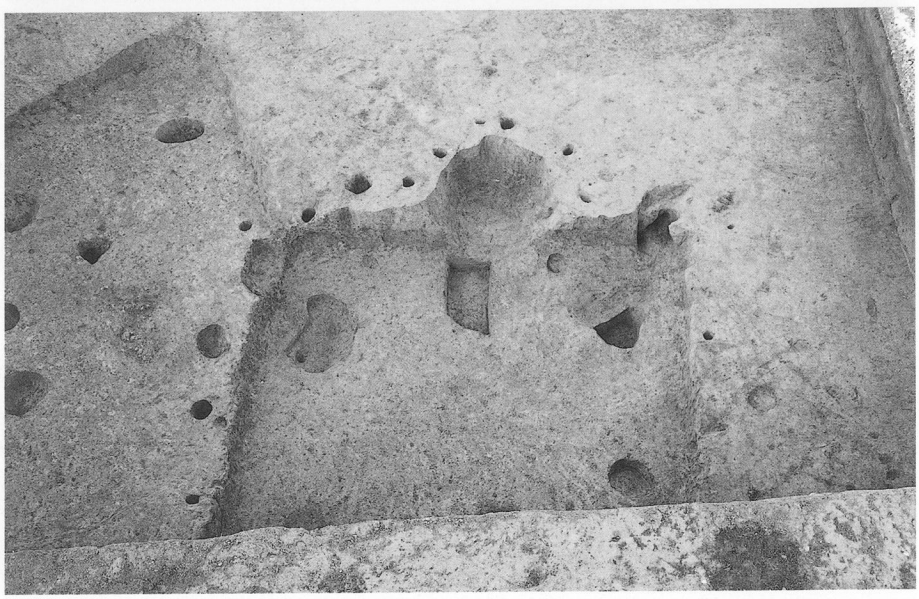
12）石器の点数は住居ごとの数ではなく，前期前葉の住居から出土した石器の器種ごとの総数である。

写　真　図　版



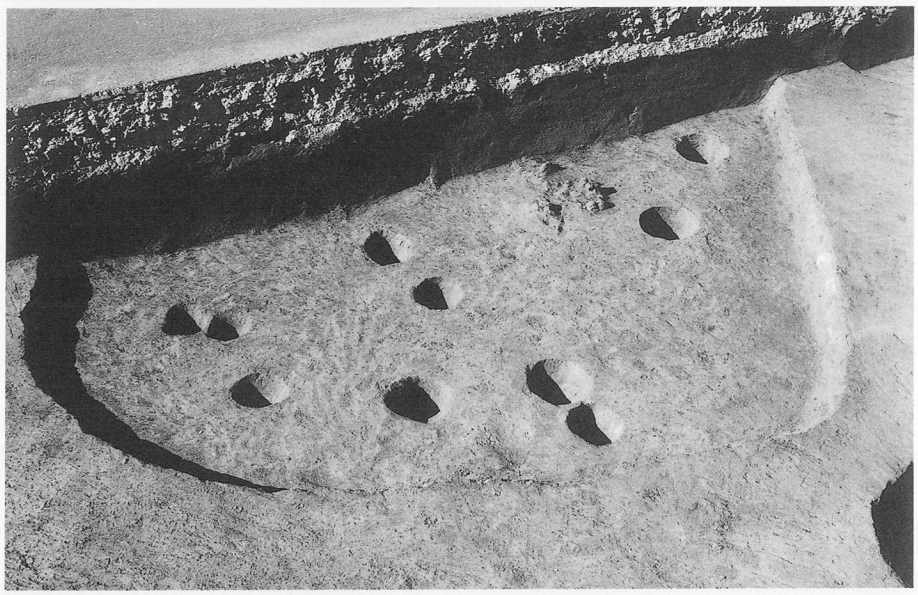
第1号住居跡
完 掘 状 況

第2号住居跡
遺物出土状況



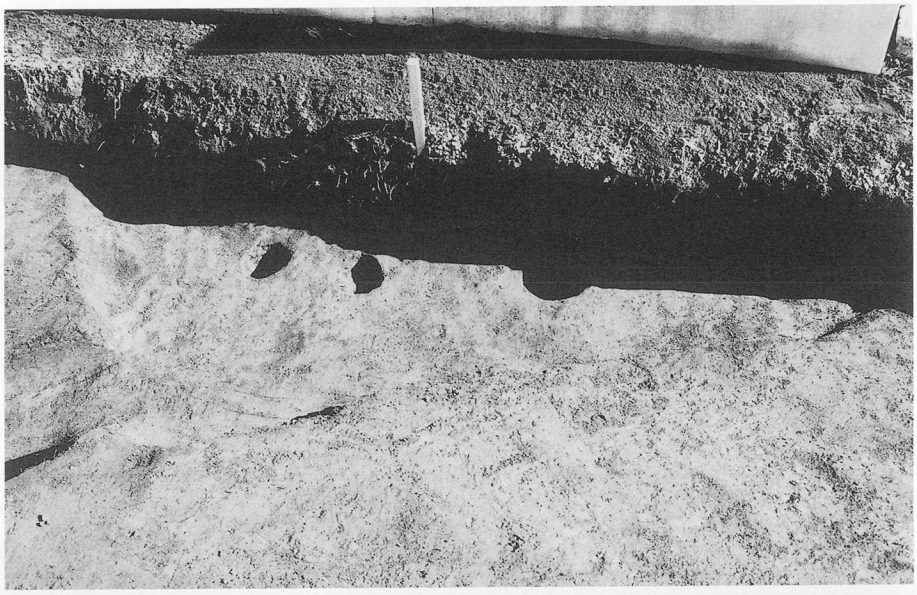
第3号住居跡
完 掘 状 況

第3号住居跡
遺物出土状況

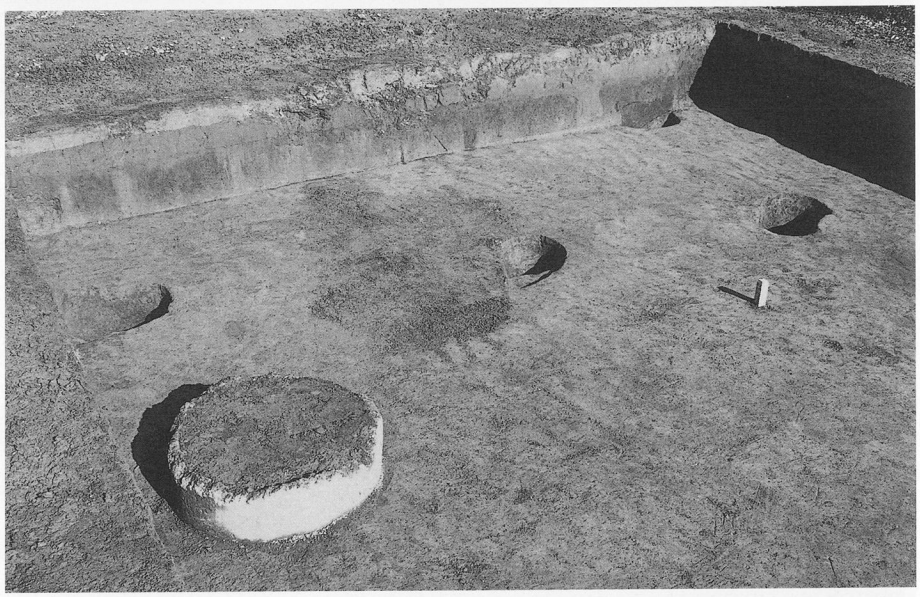


第4号住居跡
完 掘 状 況

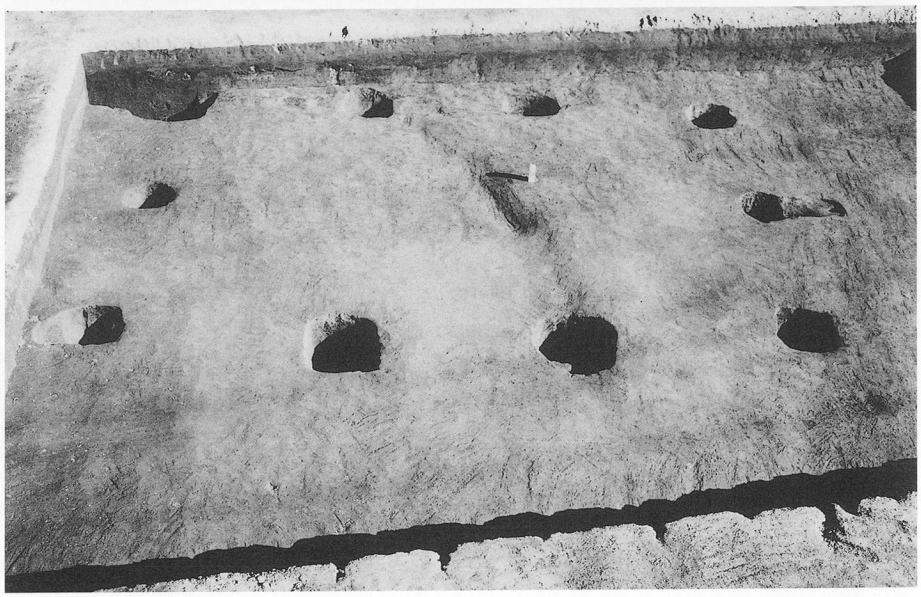
第5号住居跡
完 掘 状 況



第6号住居跡
完 掘 状 況



第1号堀立柱建物跡
完　掘　状　況



第2号堀立柱建物跡
完　掘　状　況

SI3-11

SI3-12

SI3-13

SI3-16

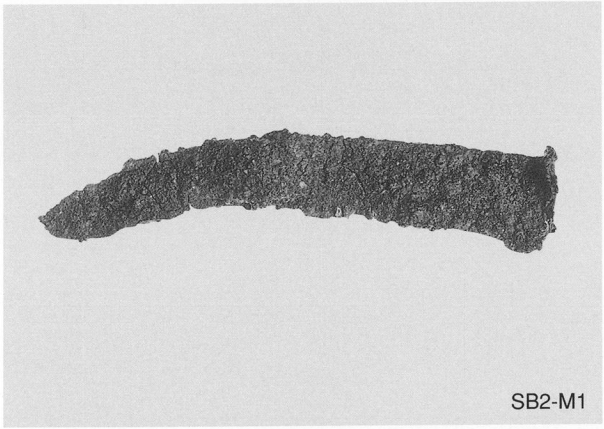
SI3-20

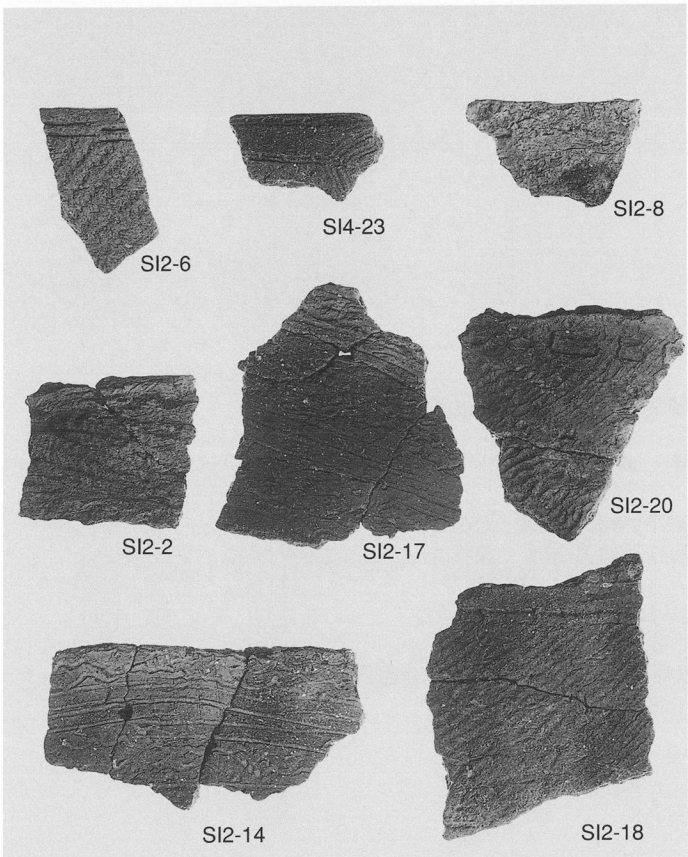
SI3-24

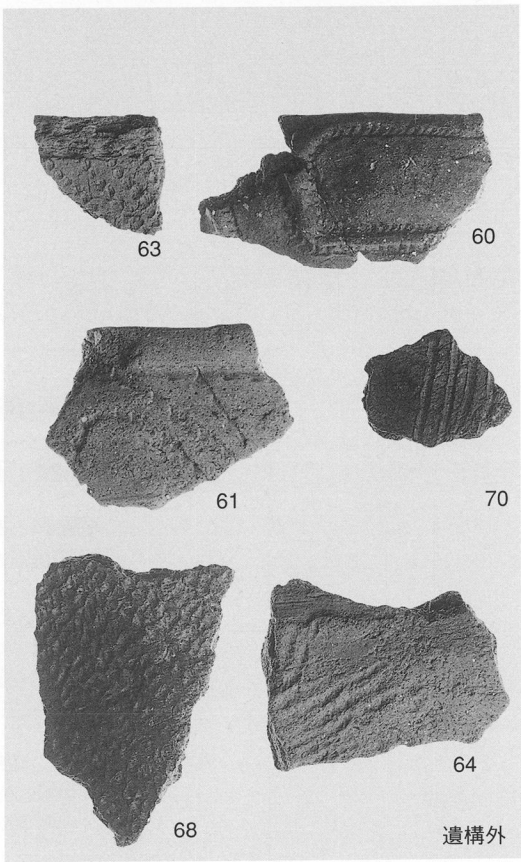
遺構外-Q1

遺構外-Q5

第3号住居跡,遺構外出土遺物







第2・3・4号住居跡,第2号堀立柱建物跡,遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第220集

袋 内 A 遺 跡

平成16（2004）年3月24日　印刷
平成16（2004）年3月26日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029-225-6587

印刷　株式会社　高野高速印刷
〒310-0853 水戸市平須町1822-122
TEL　029-305-5588